

昭和62年度

大井城跡

長野県佐久市大井城跡（黒岩城跡・王城跡・石並城跡）調査報告書

昭和63年3月

長野県佐久市教育委員会

例 言

1 本書は長野県史跡大井城跡に関する調査報告書であり、『大井城一大井城関係文献史料集』 昭和58年度、
『大井城跡（黒岩城跡）』 昭和60年度につづくものである。

2 本調査は昭和58・59・60年度建設省、昭和59・60・61・62年度文化庁の国庫補助金事業（国庫50%、県費
15%、市費35%）として実施した。

昭和58年度 『大井城一大井城関係文献史料集』刊行。国庫補助事業（建設省）

昭和59年度 大井城跡（黒岩城跡第I・II調査区）発掘調査。〃（文化庁、建設省）

昭和60年度 『大井城跡（黒岩城跡）』調査報告書 刊行。（黒岩城第I調査区）〃（〃）

昭和61年度 『大井城2・3号堀址（六供後遺跡堀址、石並城跡堀址）』発掘調査等。〃（文化庁）

昭和62年度 『大井城跡（石並城跡・王城跡・黒岩城）』調査報告書 刊行。〃（〃）

3 本書には、下記の調査成果を掲載した。

昭和54年度発掘調査実施 大井城跡（王城跡）

調査対象地番 長野県佐久市大字岩村田字古城3465-1、3467-6。

昭和55年度発掘調査実施 大井城跡（黒岩城跡北端部）

調査対象地番 長野県佐久市大字岩村田字古城3461-1。

昭和55年度発掘調査実施 六供後遺跡M1号（大井城1号堀址）

調査対象地番 長野県佐久市大字岩村田字六供後3606-11他

昭和59年度発掘調査実施 大井城跡（黒岩城跡第II調査区）国庫補助事業（文化庁、建設省）

調査対象地番 長野県佐久市大字岩村田字上信濃石3394、3401-2、3402-1・2、3403、3418-2、3421、3422

昭和61年度発掘調査実施 石並城跡堀址（大井城跡3号堀址）国庫補助事業（文化庁）

調査対象地番 長野県佐久市大字岩村田字東六供3540-1

昭和61年度発掘調査実施 六供後遺跡堀址（大井城跡2号堀址）〃（〃）

調査対象地番 長野県佐久市大字岩村田字六供後3609

職 名		昭 和 54 年 度	昭 和 55 年 度
事務局	教 育 長	浅沼 韶	浅沼 韶
	教 育 次 長	市川 亦四郎	市川亦四郎
	社会教育課長	日田 幸作	日田 幸作
	社会教育係長	塙田 孝範	井出喜平
	社会教育係	樋内 美喜男、高村 博文、林 実彦	樋内 美喜男、林 実彦
	社会教育指導員	工藤 かよ子	工藤 かよ子
調査団	顧 問	藤沢 平治	
	調 長	浅沼 韶	浅沼 韶
	調査担当	林 幸彦	林 幸彦
	調査員	井上 行雄、工藤 かよ子、羽田野 伸博、武藤 金、森泉 定勝	井上 行雄、大井 今朝太、工藤 かよ子、羽田野 伸博、森泉 定勝
	調査補助員		小山 岳夫、佐々木 宗昭、寺島 仁、三石 宗一
協 力 者			青木 久子、岩崎 房江、日田 その、大井 恵美子、大井 優美、北村 よしの、小泉 さだ子、佐藤 栄子、須藤 久米子、高野 幸枝、並木 ことみ、丸山 勝子

	協力者		茂木 きみえ、岩村田高校社会部 野沢南高校郷土史研究会
--	-----	--	--------------------------------

	職名	昭和59・60年度	昭和61・62年度
事務局	教育長	大井昭二	大井昭二
	教育次長	森泉 郁太郎（昭和60年3月退任） 飼沢 真一（昭和60年4月就任）	飼沢 真一
	社会教育課長	並木 進（昭和60年3月退任） 浅木 多喜男（昭和60年4月就任）	木内 捷
	社会教育係長	相沢 幸男（昭和60年3月退任） 関本 功（昭和60年4月就任）	関本 功（昭和62年3月退任） 小平 実（昭和62年4月就任）
	社会教育係	関本 功（昭和60年3月退任） 白石 賢次（昭和60年4月就任） 林 幸彦 高橋 和敬（昭和60年4月就任） 細萱 健一（昭和60年3月退任） 高橋 純子、高木 久江	白石 賢次 林 幸彦 高橋 和敬 萩原 一馬 羽毛田 真也 高橋 純子、高木 久江、市村 美咲
	社会教育指導員	森泉 かよ子	小林 文子（昭和62年3月退任） 根津 恵美（昭和63年1月退任） 三石 和子（昭和63年2月就任）
	会長	神津 武士（佐久市市長）	
調査会	副会長	前島 宗之（佐久市助役） 大井 昭二（佐久市教育長）	
	委員	本沢 信輔（岩手県平泉町教育委員会） 山井 茂也（佐久考古学会会長） 井出 正義（小海町文化財保護審議会） 平林 富三（佐久市文化財保護審議会会長） 小林 基三郎（× 委員） 大井 隆男（× 委員） 白倉 盛男（× ×） 小須田 康豊（× ×） 友野 一（× ×） 木内 寛（× ×） 藤沢 平治（× ×） 臼田 邦雄（× ×）	
	団長	大井 隆男	白倉 康豊
	副団長	藤沢 平治	
	調査担当	本沢 信輔、井出 正義、木内 寛、林 幸彦	林 幸彦、羽毛田 真也
	調査主任	小山 岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター） 佐々木 宗昭 森泉 かよ子	佐々木 宗昭
	調査員	井上 行雄、大井 今朝太、島田 恵子、三石 延雄、 羽毛田 律博 高村 博文（教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センター） 堤 隆（御代田町教育委員会） 三石 宗一（佐久埋蔵文化財調査センター）	井上 行雄、大井 今朝太
調査団	調査補助員	界 益子	井出 百合子、大井 恵美子、木島 美子、界 益子 高杉 昌子、橋詠 勝子、唄詠 信子、三石 和子
	協力者	赤城 幸子、赤城 たま子、浅沼 隆二、市川 香里	浅沼 ノブ江、市川 香里、臼田 俊保、江元 和香子

調 査 団	協力者	<p>市川 かおり、井出 百合子、上原 あや子、上原 幸二 白田 悅子、白田 利恵、白田 兼文、瀧野 隆子 速藤 しづか、速藤 みつ子、速藤 幸弘、大井 和子 大塚 大作、小田川 栄子、柏木 三宏、小田川 良子 金森 茂樹、神部 紗子、木内 亜友美、木内 和枝 木内 一徳、木内 政彦、工藤 勇、工藤 安彦、柳沢 壮一 黒沢 はる子、黒沢 文子、小井土 鈴子、小平 武典 小林 清彦、小林 審介、小林 利輔、小林 信男 鵜村 英羽、小山 いづみ、小山 栄次、桜井 修二 桜井 俊文、佐々木泰成、佐々木正博、佐藤 桂子 佐藤 正幸、里見 一幸、清水 光、清水 茜子 須藤 久米子、岡口 浩夫、高木 久江、高橋 かおり 高橋 鈴子、武内 広恵、田中 夏江、土屋 卑苗 土屋 厲史、堺田 美雪、伴野 刚、長坂 美樹 中沢 美春、半島 たか子、中島 とよ子、中島 文子 中島 ひで子、中条 しげ子、長沼 隆年 並木 ことみ、並木 光、野田 敏彦、羽田野 幸也 桶詰 横子、桶詰 けさよ、桶詰 信子、花里 好美 早川 康彦、林 良一、原 文子、藤田 為敏 星野 あい、郷豊 えすゞ、前島 弘子、丸山 勝子 水沢 敏子、溝尾 俊雄、御園 孝子、宮廣 きよ子 桃井 澄人、桃井 敏、森泉 泰和、森田 博美 柳沢 祐子、山崎 かな江、山崎 喜一、山崎 きよい 山崎 幸一、山崎 せつ子、山崎 徳次郎、山崎 としの 山崎 トヨ子、山崎 直、由井 かつ江、由井 肇 依田 祥一</p>	<p>遠藤 しづか、金森 治代、木内 一也、桜井 鶴彦 佐藤 武男、里見 和彦、下川 雅代、新海 由紀 高木 久江、高見沢 久美子、田島 和美、田中 夏江 内藤 治伸、内藤 業子、並木 ことみ、根津 恵美 横詰 けさよ、星野 良子、相堂 えすゞ、前沢 唯之 山崎 明、山崎 平八郎、渡辺 久美子</p>

本文目次

例 言

第Ⅰ章 調査の概要	1
第Ⅱ章 大井城跡（王城跡）の調査	5
第Ⅲ章 大井城跡（黒岩城跡北端部）の調査	
1 積穴遺構	14
2 土坑	18
第Ⅳ章 六供後遺跡の調査	
1 大井城跡1号堀址	19
第Ⅴ章 大井城跡（黒岩城跡第II調査地区）の調査	
1 据立柱建物址	22
2 井戸址	23
3 土坑	32
4 水田址状遺構	32
第VI章 六供後遺跡（大井城跡2号堀址）、石並城跡（大井城跡3号堀址）の調査	
1 大井城跡2号堀址	33
2 大井城跡3号堀址	37
第VII章 石堂遺跡の調査	40

挿 図 目 次

第1図 大井城跡位置図	
第2図 大井城跡関係発掘調査地点位置図	
第3図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）調査区設定図	
第4図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）A地点遺構実測図	
第5図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）B地点遺構実測図	
第6図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）出土遺物実測図	
第7図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）C地点東西層序断面図	
第8図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）D地点東西層序断面図	
第9図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）D地点遺構実測図	
第10図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）出土遺物実測図	
第11図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）出土遺物実測図	
第12図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）出土遺物実測図	
第13図 T _a 1号窓穴遺構・D4号土坑（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図	
第14図 大井城跡（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）遺構全体図	
第15図 D1号土坑（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図	
第16図 D2号土坑（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図	

- 第17図 D 3・D12号土坑（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図
- 第18図 T₁2号竪穴遺構（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図
- 第19図 D 9号土坑（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図
- 第20図 D11号土坑（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）実測図
- 第21図 D 5・6号土坑（昭和55年度 黒岩城跡北端部）実測図
- 第22図 D10号土坑（昭和55年度 黒岩城跡北端部）実測図
- 第23図 大井城跡（昭和55年度調査 黒岩城跡北端部）出土遺物実測図
- 第24図 六供後遺跡（昭和55年度調査）層序模式図
- 第25図 六供後遺跡M1号（大井城跡1号掘址）（昭和55年度調査 六供後遺跡）全体図
- 第26図 六供後遺跡（昭和55年度調査）出土遺物実測図
- 第27図 大井城跡（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）遺構全体図
- 第28図 建物址（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査）実測図
- 第29図 1号井戸址（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第30図 D 1号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第31図 D 2号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第32図 D 3号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第33図 D 4号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第34図 D 5号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第35図 D 6号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第36図 D 7号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第37図 D 8号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第38図 D 9号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第39図 D 10号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第40図 D 11号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第41図 D 12号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第42図 D 13号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第43図 D 14号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第44図 D 15号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第45図 P₁号・P₂号ピット（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第46図 P₁号・P₂号・P₃号ピット（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第47図 P₄号・P₅号ピット（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）実測図
- 第48図 トレンチ4層序断面図（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）
- 第49図 トレンチ5層序断面図（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）
- 第50図 トレンチ4・5層序断面模式図
- 第51図 大井城跡2号掘址（昭和61年度調査 六供後遺跡）Aトレンチ実測図
- 第52図 大井城跡2号掘址（昭和61年度調査 六供後遺跡）Bトレンチ実測図
- 第53図 大井城跡2号掘址（昭和61年度調査 六供後遺跡）全体図
- 第54図 大井城跡3号掘址（昭和61年度調査 石並城跡）実測図
- 第55図 大井城跡2号掘址（昭和61年度調査 六供後遺跡）Cトレンチ実測図
- 第56図 石堂遺跡T₁号竪穴遺構（昭和59年度調査）実測図

- 第57図 石堂遺跡 T_a1号竪穴遺構炉址（昭和59年度調査）実測図
 第58図 石堂遺跡 T_a1号竪穴遺構柱穴断面図（昭和59年度調査）
 第59図 石堂遺跡（昭和59年度調査）T_a1号竪穴遺構出土遺物実測図
 第60図 石堂遺跡（昭和59年度調査）T_a1号竪穴遺構出土遺物実測図
 第61図 佐久地方古墳時代後期の土器編年
 第62図 佐久地方古墳時代後期の土器編年
 第63図 佐久地方古墳時代後期の土器編年
 第64図 佐久地方古墳時代後期の土器編年

図版目次

- 図版 1 大井城跡（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）
 図版 2 1 黒岩城跡第II調査区全景（北方より） 2 黒岩城跡第II調査区全景（東方より）
 3 黒岩城跡第II調査区南部（北東方より）
 図版 3 1 黒岩城跡第II調査区 建物址（南方より）
 2 黒岩城跡第II調査区 建物址（東方より）
 3 黑岩城跡第II調査区 D14号～15号土坑（北方より）
 図版 4 1 黒岩城跡第II調査区 1号井戸址 2 黒岩城跡第II調査区 1号井戸址
 3 黑岩城跡第II調査区 1号井戸址
 図版 5 1 黒岩城跡第II調査区 1号井戸址 2 黑岩城跡第II調査区 1号井戸址
 図版 6 1 黒岩城跡第II調査区（北方より） 2 黑岩城跡第II調査区（北方より）
 3 黑岩城跡第II調査区 畦状遺構暗渠（北方より）
 図版 7 1 黑岩城跡第II調査区（南方より） 2 黑岩城跡第II調査区（東方より）
 3 黑岩城跡第II調査区（東方より）
 図版 8 1 黑岩城跡第II調査区 暗渠とトレンチ（東方より） 2 黑岩城跡第II調査区 トレンチの層序
 3 黑岩城跡第II調査区 下駄出土状態
 図版 9 1 黑岩城跡第II調査区 暗渠（東方より） 2 黑岩城跡第II調査区 暗渠（西方より）
 図版 10 1 黑岩城跡第II調査区 スナップ（南西方） 2 黑岩城跡第II調査区 スナップ（東方より）
 3 黑岩城跡第II調査区 スナップ（西方より）
 図版 11 1 工事が進む黒岩城跡（北東方より） 2 工事が進む黒岩城跡遠景（北東方より）
 3 調査スナップ
 図版 12 1 王城の櫓（長野県天然記念物）とA地点に建てられた四阿 2 王城跡D地点（西方より）
 図版 13 1 王城跡D地点（西方より） 2 王城跡D地点竪穴遺構（西方より） 3 王城跡D地点西側部（南東方より）
 図版 14 1 黑岩城跡北端部調査前遠景（中央道路左が黒岩城跡、右が王城跡、東方より）
 2 黑岩城跡北端部調査前近景（東方より） 3 黑岩城跡北端部調査前近景（東方より）
 図版 15 1 黑岩城跡北端部調査前近景（西方より） 2 黑岩城跡北端部調査前近景（西方より）
 3 黑岩城跡北端部調査前近景（東方より）
 図版 16 1 黑岩城跡北端部グリッド掘状況（西方より） 2 黑岩城跡北端部調査スナップ（東方より）
 3 黑岩城跡北端部 T_a1・2号（北方より） 4 黑岩城跡北端部 T_a1・2号遺物出土状態

- 5 黒岩城跡北端部 D5-11号（南方より） 6 黒岩城跡北端部 D3号（南方より）
7 黒岩城跡北端部 D4号（北方より） 8 黒岩城跡北端部出土遺物
9 黒岩城跡北端部段状遺構（南方より） 10 黒岩城跡北端部段状遺構（北方より）
- 図版 17 1 六供後遺跡 A-Dトレンチ（南方より） 2 六供後遺跡M1号（大井城跡1号堀址）（東方より）
3 六供後遺跡M1号（大井城跡1号堀址）（北東方より）
- 図版 18 1 六供後遺跡M1号 Fトレンチ（大井城跡1号堀址）（北方より） 2 六供後遺跡M1号 トレンチ（大井城跡1号堀址）（東方より） 3 六供後遺跡M1号 Eトレンチ（大井城跡1号堀址）（東方より）
- 図版 19 1 六供後遺跡堀址 Aトレンチ（大井城跡2号堀址）（西方より）
2 六供後遺跡堀址 Aトレンチ（大井城跡2号堀址）（北方より）
- 図版 20 1 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（東方より） 2 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（南東方より） 3 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（東方より）
- 図版 21 1 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（北方より） 2 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（北方より）
- 図版 22 1 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（北方より） 2 六供後遺跡堀址 Bトレンチ（大井城跡2号堀址）（南方より）
- 図版 23 1 六供後遺跡堀址 Cトレンチ（大井城跡2号堀址）（西方より） 2 六供後遺跡堀址 Cトレンチ（大井城跡2号堀址）（東方より） 3 六供後遺跡堀址 Cトレンチ（大井城跡2号堀址）（北方より）
- 図版 24 1 石並城跡堀址（大井城跡3号堀址）（西方より） 2 石並城跡堀址（大井城跡3号堀址）（東方より）
- 図版 25 1 石並城跡堀址（大井城跡3号堀址）（西方より） 2 石並城跡堀址（大井城跡3号堀址）（南方より）
- 図版 26 1 石堂遺跡 T_a1号竪穴遺構 2 石堂遺跡 T_a1号竪穴遺構（北方より）
- 図版 27 1 石堂遺跡 T_a1号竪穴遺構（南方より） 2 石堂遺跡 T_a1号竪穴遺構出土遺物

第Ⅰ章 調査の概要

大井城跡と総称される石並城跡・王城跡・黒岩城跡は、佐久市岩村田の市街地東方にあって南流する湯川の西岸に位置している。昭和46年5月27日に王城跡と黒岩城跡が「大井城跡」として長野県史跡に指定された。城跡跡の平坦面は、畑地として耕作され、石臼や土器等既出遺物が知られている。特に食糧難の昭和20年前後には、増産のために深耕されたのであろう、土器や石臼などが荷車等の運搬車で運んで捨てるほど出土したという。

昭和50年代に入つて史跡指定範囲内で史跡現状変更および史跡解除が5件おこっている。昭和51年度個人住宅建設のため黒岩城跡北西部、昭和54年度佐久市王城公園四阿・公共便所建設と佐久建設事務所県道佐久・豊界線（佐久市都市計画街路222西本町一荒宿線改良工事）のため王城跡南西端部等、昭和55年度佐久建設事務所県道佐久・豊界線（佐久市都市計画街路222西本町一荒宿線改良工事）のため黒岩城跡北端部、昭和59年度佐久市大和町小集落地区改良事業のため黒岩城跡南部が、それぞれ破壊された。昭和61年度は、石並城の西側に南北に走る地形の表面上堀址と思われる部分と、岩村田北保育園の北側に東西に走る堀址と推察される部分の調査をそれぞれ実施した。検出された遺構と遺物は、下記のとおりである。

昭和54年度 大井城跡（王城跡）

検出遺構——竪穴遺構1棟、土坑3基、溝状遺構1条、ピット群2ヶ所。

出土遺物——古墳時代須恵器、土師器、中世陶磁器、かわらけ、内耳土器。

昭和55年度 大井城跡（黒岩城跡北端部）

検出遺構——竪穴遺構2棟、土坑12基、段状遺構1ヶ所。

出土遺物——中世陶磁器、かわらけ、内耳土器。

昭和55年度 六供後遺跡

検出遺構——堀址1基。

出土遺物——弥生時代の土器、古墳時代の須恵器、中世のかわらけ。

昭和59年度 大井城跡（黒岩城跡第II調査地区）

検出遺構——建物址1棟、井戸址1基、土坑15基、水田址状遺構。

出土遺物——中・近世陶磁器、下駄。

昭和61年度 六供後遺跡

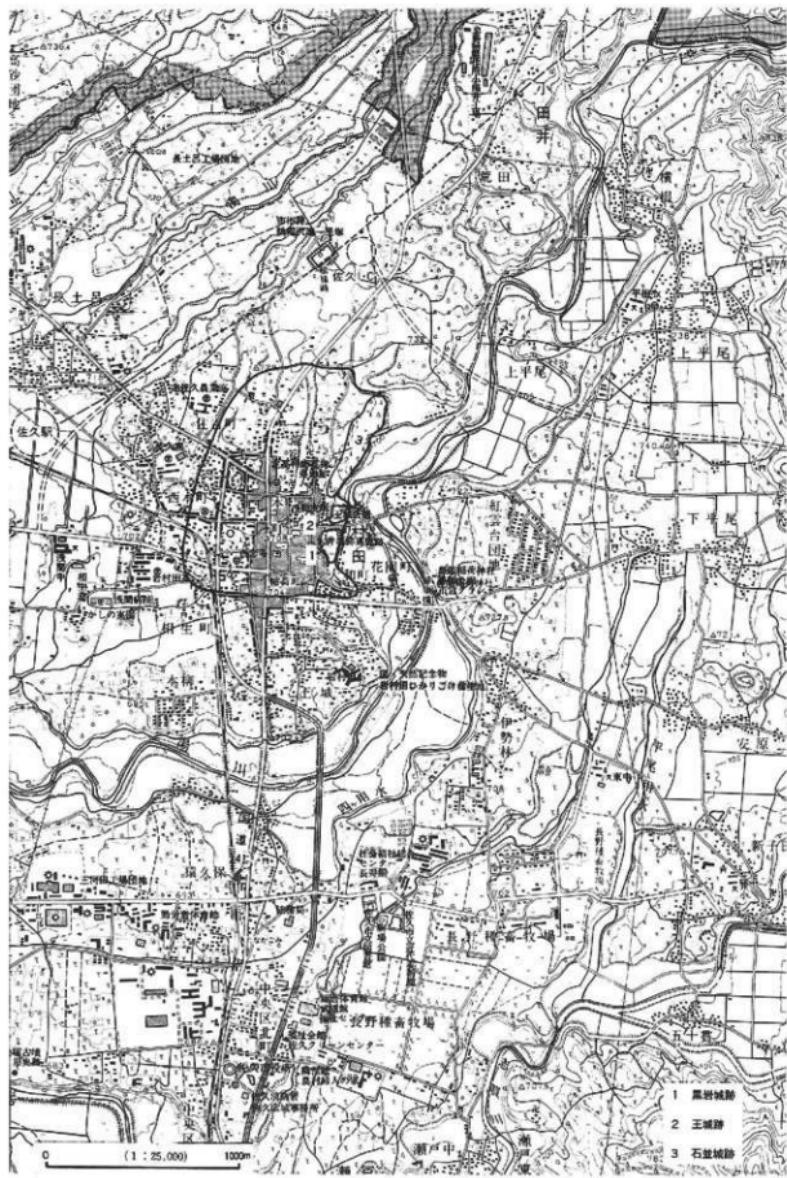
検出遺構——堀址1基。

出土遺物——なし。

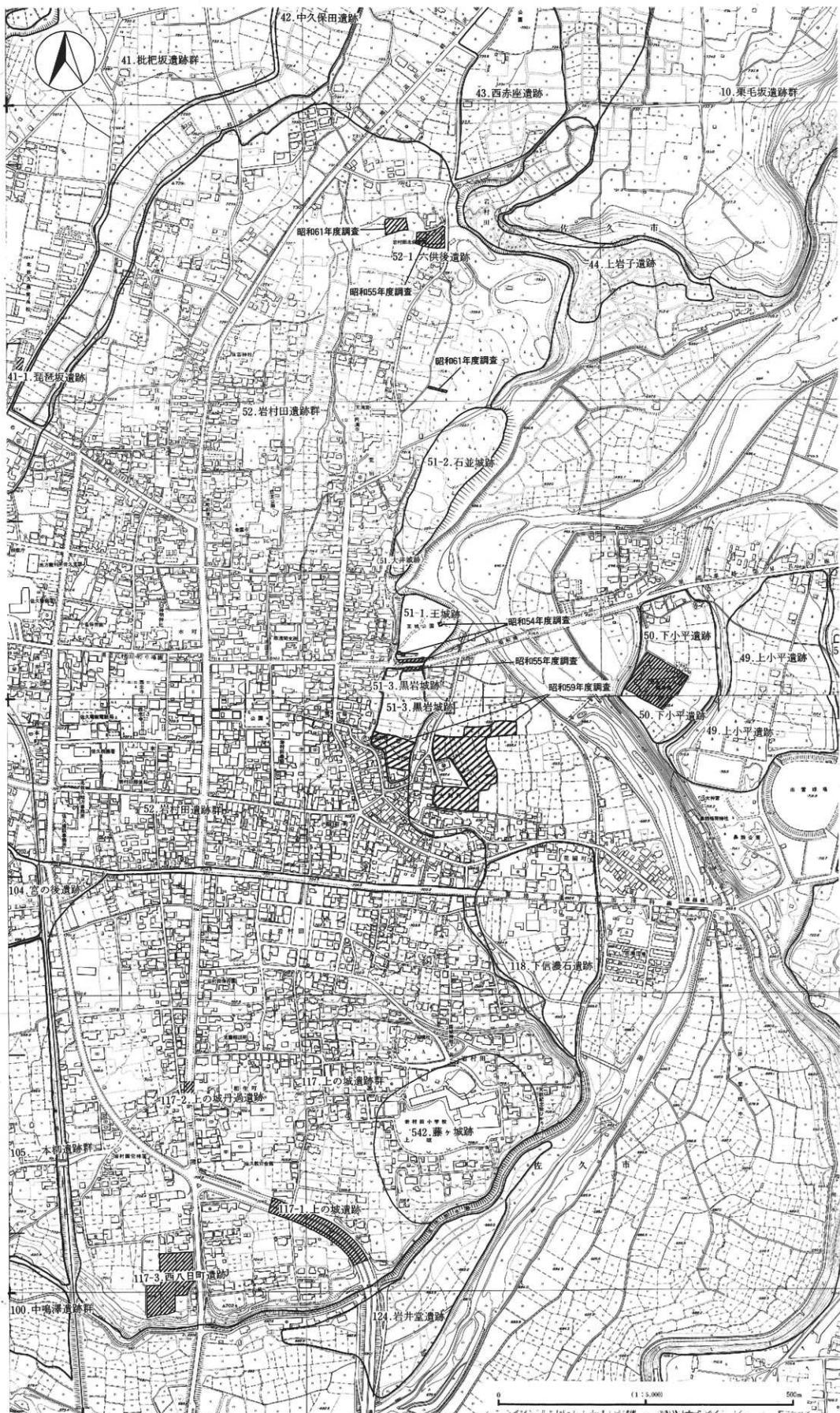
昭和61年度 大井城跡（石並城跡）

検出遺構——堀址1基。

出土遺物——中・近世陶磁器。



第1図 大井城跡位置図

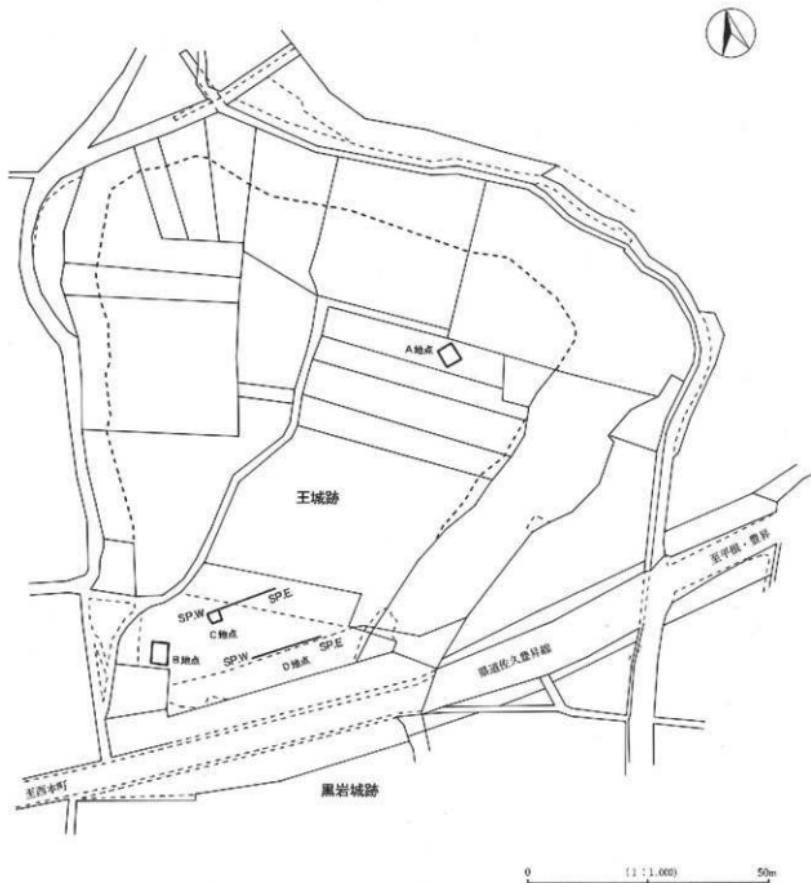


第2図 大井城跡開発調査地点位置図(佐久市本領ト・15に加筆)

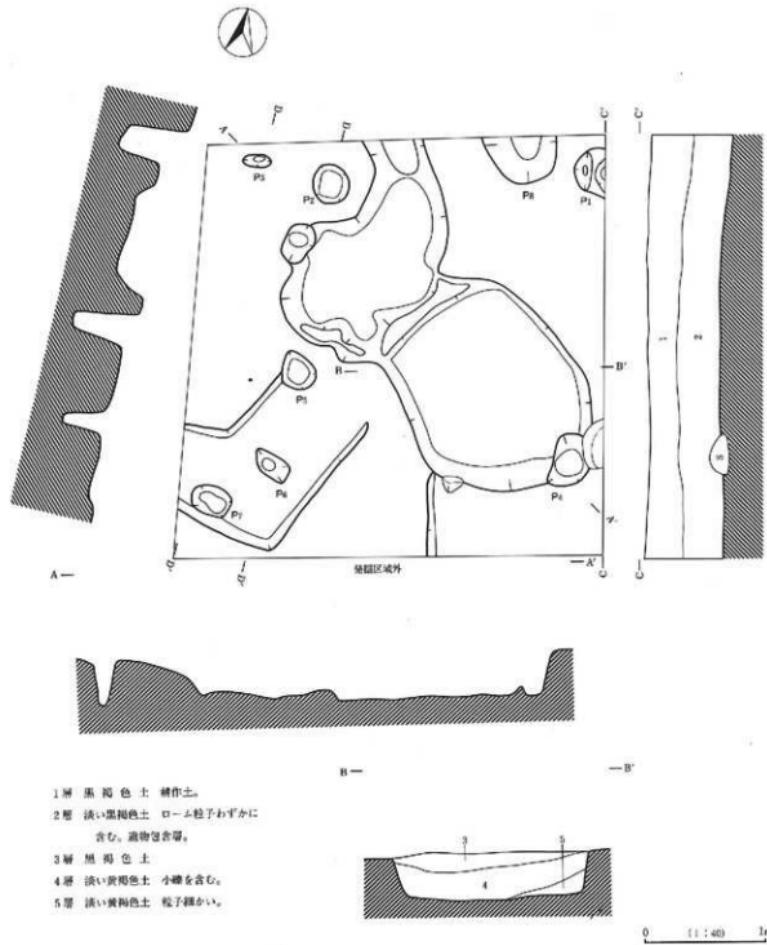
第II章 大井城跡（王城跡）の調査

長野県史跡大井城跡の一角を占める王城跡は、昭和54年度に2回の現状変更を受けた。佐久市都市計画課による都市計画公園（王城公園）整備事業と佐久建設事務所による佐久市都市計画街路線222西本町一荒宿線改良工事とによる。公園整備事業の当初計画にあった噴水設置については計画中止となったが、四阿と公共便所および道路改良工事により現状が変更される対象地について事前調査を行なった。

四阿建設地点をA、公共便所建設地点をB、道路工事地点をD地点とした。C地点は、まったくの手違いで重



第3図 大井城跡（昭和54年度調査 王城跡）試査区設定図

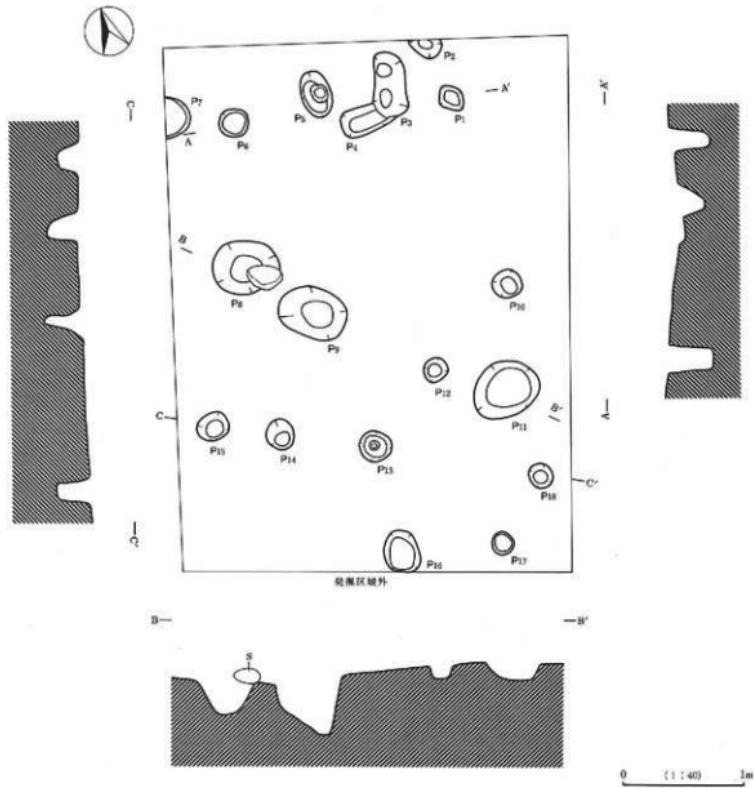


第4図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡) A地点遺構実測図

機によりトレンチ状に破壊されてしまった地点である。

A地点は東西3.4m、南北3.4mの範囲を調査した。地表下30~40cmで地山に至る。狭い範囲内の調査ではあったが、第4図に表わしたように大小11個のピットが検出された。出土遺物には、内耳土器10片、かわらけ49片、陶器3片、瓦器5片、山茶碗(?)11片、弥生土器4片、土師器3片があり、図示可能なものは第6図に示した。

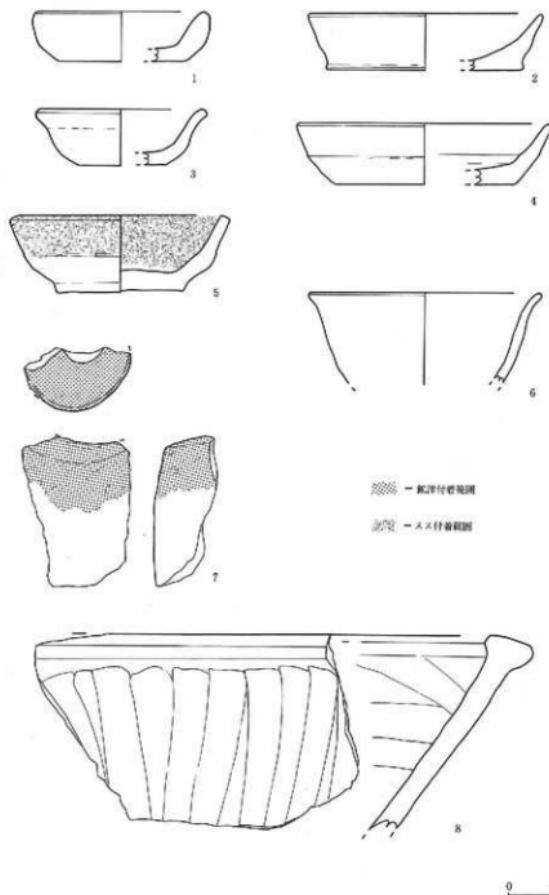
B地点は、東西4.5m、南北3.2mの範囲を調査した。径20cm前後~径40cm前後を測る中小のピット群(18個)が



第5図 大井城跡（昭和34年度調査 王城跡）B地点遺構実測図

検出された。小規模のP₄・P₆・P₇およびP₁₃・P₁₄・P₁₅が一つの建物址を構成していたかもしれない。他のピット群は、明確な組合せが狭い範囲のため把握できなかった。出土物は次のものがある。内耳土器26片、かわらけ28片、瓦器1片、陶器（染付・灰釉）磁器4片、土師器1片、須恵器2片、粉挽臼の上臼（黒色多孔質安山岩）1点で図示可能なものは第6・10・11図に示した。

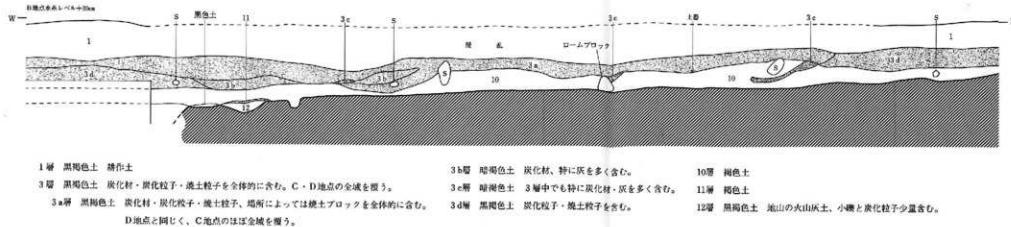
C地点はトレンチ状に深掘された土層の断面観察を行ったにすぎず、遺構の確認はされていない。40cm程の耕作土下に層厚20~40cmの黒褐色を呈する第3層（この層は、さらに、炭化材・炭化粒子・焼土粒子・焼土プロックを全体に含む3層、炭化材・特に灰を多く含む3層、第3層中特に炭化材・灰を多く含む3層、炭化粒子・焼土粒子を含む3層に細かく分層される。）この第3層はD地点においても同様に広範囲で確認されている。C地点の西側部に深さ20~40cm、東西の長さ4mを測る規模で落ち込んでいる個所があって、遺構の存在が考えられる。第3層の直下は、地山の火山灰土・小砾等や炭化粒子を少量含む第10層が認められた。（第7図）C地点から



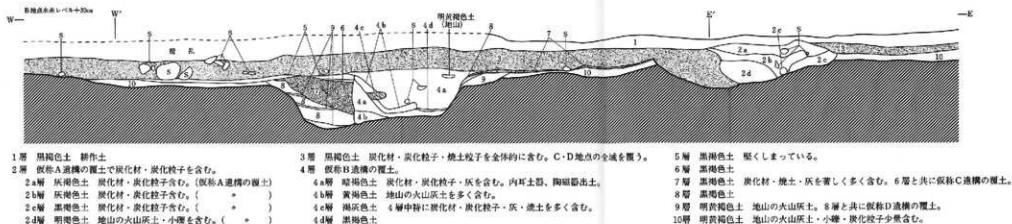
第6図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡)出土遺物実測図

はかなりたくさんの遺物が出土した。内耳土器片31点、かわらけ片51点、常滑片5点、天目茶碗・美濃鉄船片等4点、白磁・染付茶碗片等7点、瓦器片2点、山茶碗片3点、土師器片1点、須恵器蓋片2点、弥生土器片2点、粉挽臼上臼・下臼、茶臼上臼・下臼(以上の4点は黒色多孔質安山岩)、茶臼下臼受皿部(輝石安山岩)1点、白頬計5点、他に凹石(軽石)1点がある。

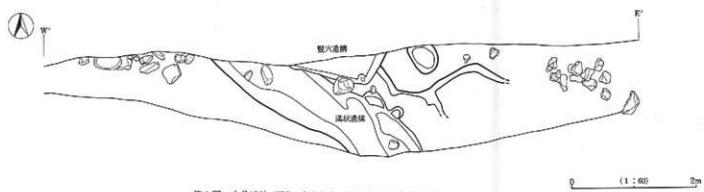
D地点は佐久建設事務所による道路拡幅部分である。平面的には南北0.4~2m、東西15mとわずかな面積であったため確認された遺構は、平面プラン等不明瞭な点が多い。しかし、土層はC地点に認められた第3層が、本地点でも明確に把握され、しかも、この層の前後に遺構が3時期にわたって構築されていることが確認され、



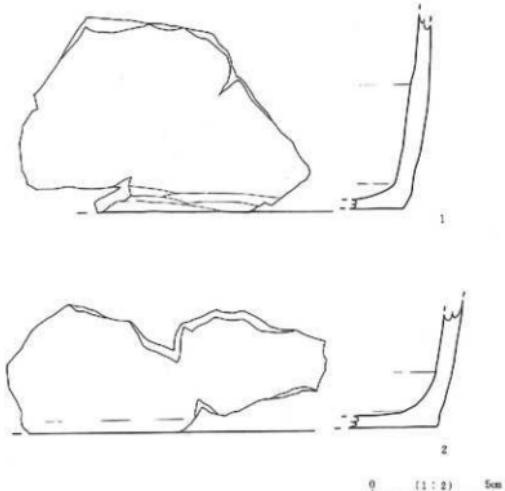
第7図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡) C地点東西稲作断面図



第8図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡) D地点東西稲作断面図



第9図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡) D地点遺構実測図



第10図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡)出土遺物実測図

王城跡での鍵層であることが判明したことはたいへん意義深いことである。

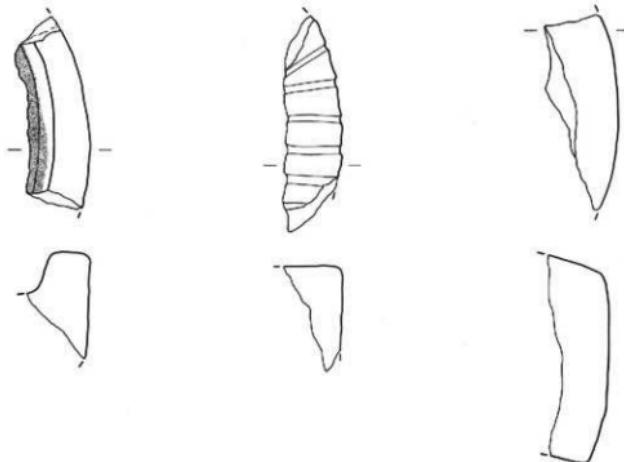
D地点は大きくとらえて8層が観察できる。(第8図) 第1層は層厚20~30cmを測る耕作土層である。第2層は仮称A遺構の覆土を構成する。2_a層・2_b層は灰褐色を呈し、炭化材・炭化粒子を含む。2_c層は黒褐色で炭化材・炭化粒子を含む。2_d層は地山の火山灰土と小礫を含む。第2層は第3層を切っている。つまり、仮称A遺構は第3層堆積後の遺構といえ、2_c層および2_d層は構成土と堆積状況から人為的な埋土と思われる。第3層はD地点の全体から認められる層で炭化材・炭化粒子・焼土粒子を含んでいて多くの木材等が燃えたことを語っている。仮称B遺

構は地山を35cm以上掘り込んで構築されていて、この第3層が充填している。第4層は第5層・第7層等を掘り込んで構築されている仮称C遺構の覆土で4層に細分できる。4_a層は地山の火山灰土を主とし、炭化材・炭化粒子・焼土粒子・灰を含む4_b層と互層をなしてて、明らかに人為的な埋土と考えられる。4_a層からは、多くの内耳土器・陶磁器が出土した。このC遺構は、仮称D遺構と仮称E遺構を破壊して構築されている。第7層は仮称D遺構の覆土を構成し、C遺構に一部破壊され、さらに、C遺構の東側へ伸びている。この層は他の層に比べて特に炭化材・灰が顯著で物が激しく燃えたことを示している。D遺構の下方には、仮称E遺構があって第8層と第9層の互層が覆土となっている。このように2個所に遺構の重複がみられ、5基の遺構の落ち込みが確認されほぼ全域にみられる第3層の上部に2基、下部に3基の遺構が存在する。いづれからも、内耳土器・かわらけ・陶磁器等が出土している。

D地点の遺構を整理すると次のようになる。

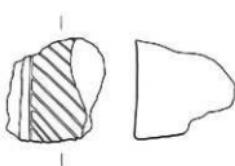
E遺構→D遺構(第7層の炭化材等は、本遺構等が何らかの原因により燃えたことを示している。)→C遺構→B遺構(第3層に含まれている炭化材・炭化粒子・焼土粒子は、B遺構等多くの建物等が燃えたことを示唆するように広範囲に渡って形成されている。C地点の断面に確認された遺構もB遺構と同時期に存在していたといえよう。また、B遺構が構築される時、C遺構が凹地でなくほとんど平坦になっていたか平坦に整地されていたといふことが、第3層の堆積状況でうかがうことができる。)→A遺構。

第6図1・2・8、第11図2~4、第12図1~3→王城跡C地点出土遺物。第6図3~5・7、第11図1→王城跡B地点出土遺物。第10図1→王城跡A地点出土遺物。第10図2→王城跡B地点出土遺物。



(mm)					
発掘番号	出土日	出土地点	直 径	高さ	ふくみ
	粉挽臼 上臼(上臼破片)	B 地点	—	(65)	—
分画 × 様	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
—	—	黑色多孔質安山岩	—	—	
備考					

(mm)					
発掘番号	出土日	出土地点	直 径	高さ	ふくみ
	粉挽臼 上臼破片	C 地点	—	(65)	—
分画 × 様	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
—	—	黑色多孔質安山岩	左	—	
備考					

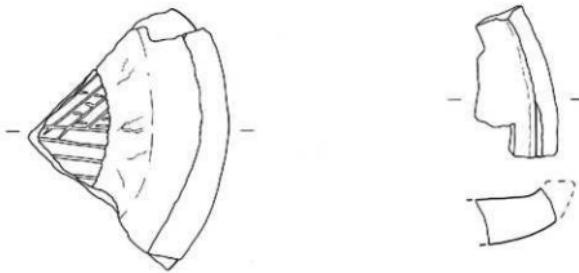


(mm)					
発掘番号	出土日	出土地点	直 径	高さ	ふくみ
	粉挽臼 下臼破片	袁 挿	—	(128) (1)	
分画 × 様	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
—	—	黑色多孔質安山岩	—	—	
備考					

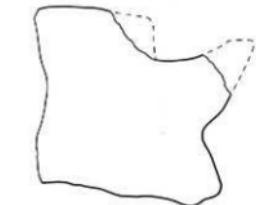
(mm)					
発掘番号	出土日	出土地点	直 径	高さ	ふくみ
	茶臼 上臼破片	C 地点	—	(90) (2)	
分画 × 様	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
—	—	黑色多孔質安山岩	左	—	
備考					

0 (1 : 3) 10cm

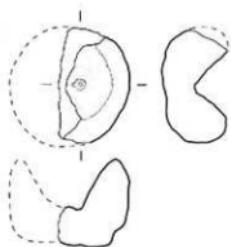
第11図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡)出土遺物実測図



(mm)					
標品番号	出土日 茶臼下臼(受皿部)	出土地点 C 地点	直 径	高さ	ふくみ
			—	(28)	—
分面 × 背	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
—	—	輝石安山岩	左	—	
備考					



(mm)					
標品番号	出土日 茶臼下臼	出土地点 C 地点	直 径	高さ	ふくみ
			—	(122)	(2)
分面 × 背	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
—	—	黑色多孔質安山岩	左	—	
備考					



0 (1 : 3) 10mm

第12図 大井城跡(昭和54年度調査 王城跡)出土遺物実測図

第III章 大井城跡（黒岩城跡北端部の調査）

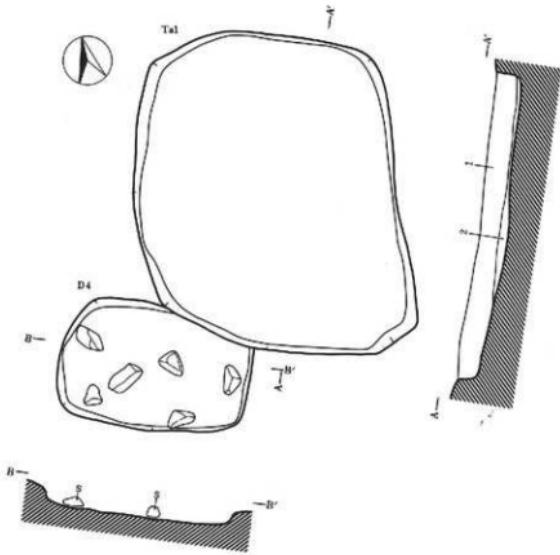
黒岩城跡の北端部は、昭和51年度に個人住宅建設のため史跡現状変更を行っている。昭和55年度はこの東側部分を佐久市都市計画路線222西本町一荒宿線改良工事（県道佐久・豊界線拡幅工事）のため史跡現状変更をし、事前の発掘調査を行なった。調査面積は約450m²である。調査は、昭和55年7月18日～7月31日の12日間行なわれた。

この地点の土層は、層厚20～30cmの耕作土直下が地山である。地山は浅間火山の噴出堆積物であって黄褐色や赤褐色・淡橙色をしている。本調査においては、昭和54年度に実施された王城跡で確認された焼土・炭化物を含んだ土層は検出されなかったが、これは耕作土が浅いということもあり存否の速断は妥当ではないだろう。

遺構は、2棟の堅穴造構、12基の土坑、1ヶ所の段状造構（比高25cm）が検出された。遺物は内耳土器、かわらけ、陶磁器片等が出土した。図示可能なものは第23図に示した。

T_a 1号堅穴造構（第13図）

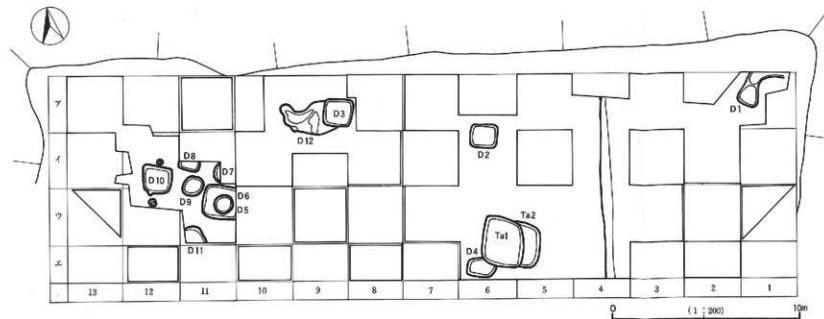
南北260cm、東西200cm、壁残高20cmを測る。長軸方向はN-16°-Eをさす。T_a 2号堅穴造構・D 4号土坑と重複し一部を破壊し構築している。重複部分には地山の灰褐色土を貼っている。（第13図土層断面図2層）覆土に



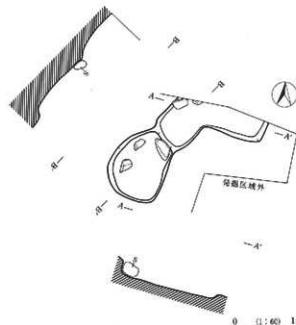
1層 黄色土 焼土・炭化粒子含む。淡橙色の地山(火山灰土)を含む。
2層 灰褐色土 淡橙色の地山土を多量に含む。

0 (1:40) 1m

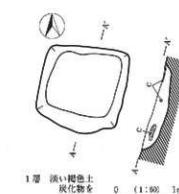
第13図 Ta 1号堅穴造構・D 4号土坑実測図 (昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)



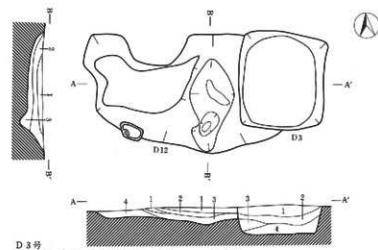
第14図 大井寺跡 (昭和55年度調査 黒岩城跡北端部) 遺構全図



第15図 D1号土坑測定図 (昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)



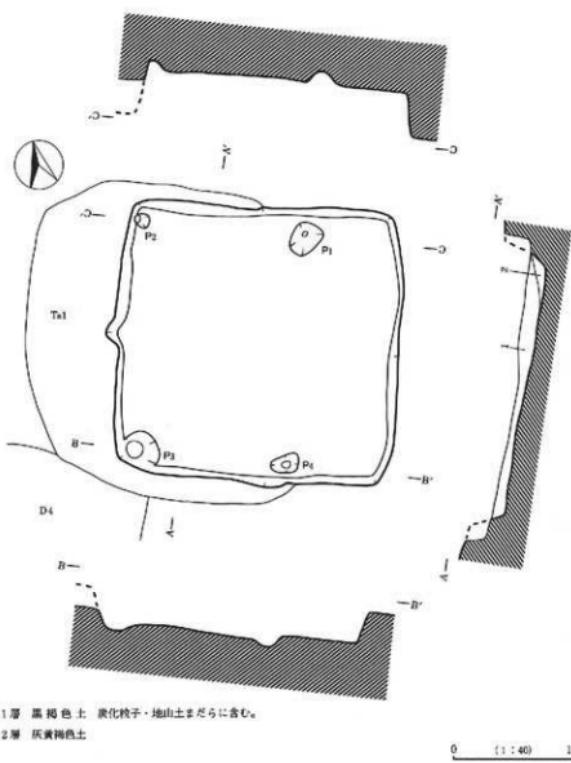
第16図 D2号土坑測定図 (昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)



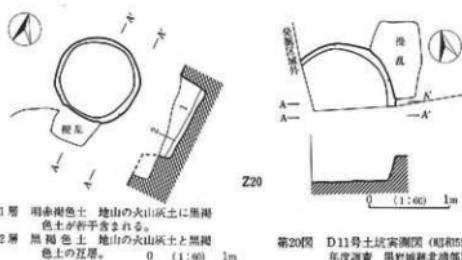
- D3号
 1層 棕色土 黄褐色のローム粒子、
炭化物含む。
 2層 灰褐色土 灰褐色のセメント粒子を
多量に、黄褐色・炭化物含む。
 3層 灰褐色土 灰白色ロームを多量に、
炭化物含む。
 4層 从白褐色土 白褐色ロームを多量に、
(3層よりも)含む。
- D12号
 1層 褐色土 黄褐色のローム粒子、
炭化物少含む。しまりなし。
 2層 灰褐色土 1層よりも多く白褐色ロー
ムを含む。炭化物多い。
 3層 黄褐色土 黄褐色ローム、炭化物
含む。しまりある。
 4層 棕色土 黄褐色のローム粒子
少し含む。

0 (1:60) 1m

第17図 D3号・D12号土坑測定図 (昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)



0 (1:40) 1m



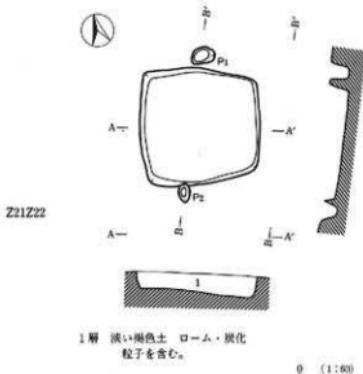
は、焼土・炭化粒子等み込む。壁は垂直に近く立ち上り出土遺物なし。

T 2号竖穴造構 (第18図)

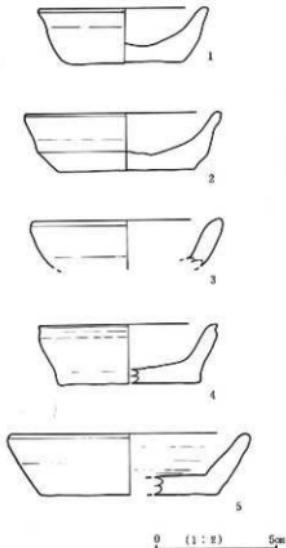
T 2号竖穴造構に西側上面を棲されている。南北2.3m、東西2.4mの方形プランを呈し、壁残高0.35m、主軸はN-14°-Eを測る。床面は堅緻で壁際は軟弱である。ピットは四隅から4個検出され柱穴と考えられる。遺物は、第23図1・2のかわらけがある。1は口径7.0cm、器高2.2cm、底径5.0cmを測り、口縁部には煤が付着している。2



第21図 D5号・D6号土坑実測図(昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)



第22図 D10号土坑実測図(昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)



第23図 大井城跡(昭和55年度調査 黒岩城跡北端部)出土遺物実測図

は口径8.1cm、器高2.3cm、底径5.0cmを測り、内面に煤が付着している。

D 1号～D 13号土坑(第13・15～17・19～22図)

D 1号土坑は幅94cmでL字形を呈し、壁残高は18cmを測る。D 2号土坑は東西140cm、南北130cm、壁残高25cmを測る。内耳土器の底部片出土。覆土に多量の炭化物を含む。D 3号土坑はD 12号土坑を破壊している。南北150cm、東西140cm、壁残高44cm、かわらけと内耳土器片が出土している。径20cm大の礫に煤が付着。D 12号土坑は南北186cm、東西300cm、壁残高8～20cmを測る不整形を呈す。D 4号土坑はT字型に北側上面を壊されている。南北100cm、東西160cm、壁残高22cmを測る。ほぼ同一の高さに5個の礫が出土した。D 5号土坑はD 6号を壊して、ほぼ円形を呈し径90cm、壁残高25cmを計測する。D 6号土坑は南北・東西長155cmの方形で壁残高20cmを測る。D 7・8・11号土坑はいずれも一部の検出にとどまった。D 9号土坑は径120cmを測る円形、壁残高40cm。D 10号土坑は南北145cm、東西150cm、壁残高25cmのはば方形プラン。

第23図 1・2はT字型土坑、5はD 3号土坑、3はウー11グリッド、4はエー6グリッドからそれぞれ出土した。

グリッドアーエー4グリッド内から東側が25cm程度低くなる南北に走る段状遺構が検出されたが詳細は不明。

第IV章 六供後遺跡の調査

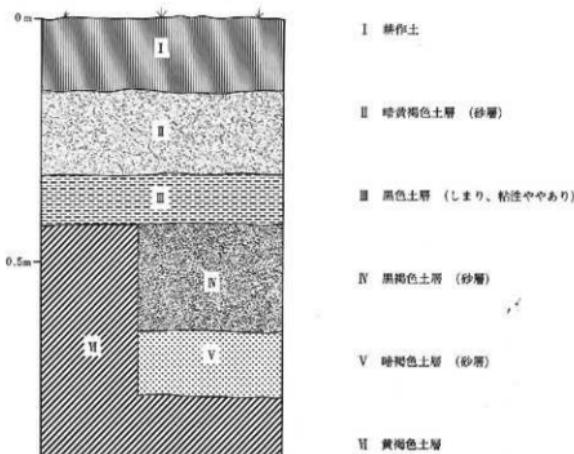
本調査は、昭和55年5月4日～5月17日の10日間実施した。本遺跡は岩村田遺跡群の北端に位置し、大井城跡の一角を占める石並城跡の西側に近接している。調査の契機は、社会福祉法人いづみ会の保育園園舎建設工事による。付近は、弥生時代の壺・甕形土器などが出土している。

この地点の土層は、第24図に示した。地山の黄褐色土（浅間火山の噴出堆積物）までは、50～100cmほどの堆積土がある。1層は耕作土、2層は砂層で北側が30cm、南側で10cmと北が厚い。3層は南に厚く北に薄く浅間山麓の北から南へゆるやかに傾斜する地形に一致しているが、調査北端は地山が北側に傾斜しており自然でない。これは、第VI章でふれる大井城跡2号堀址の存在に起因している。

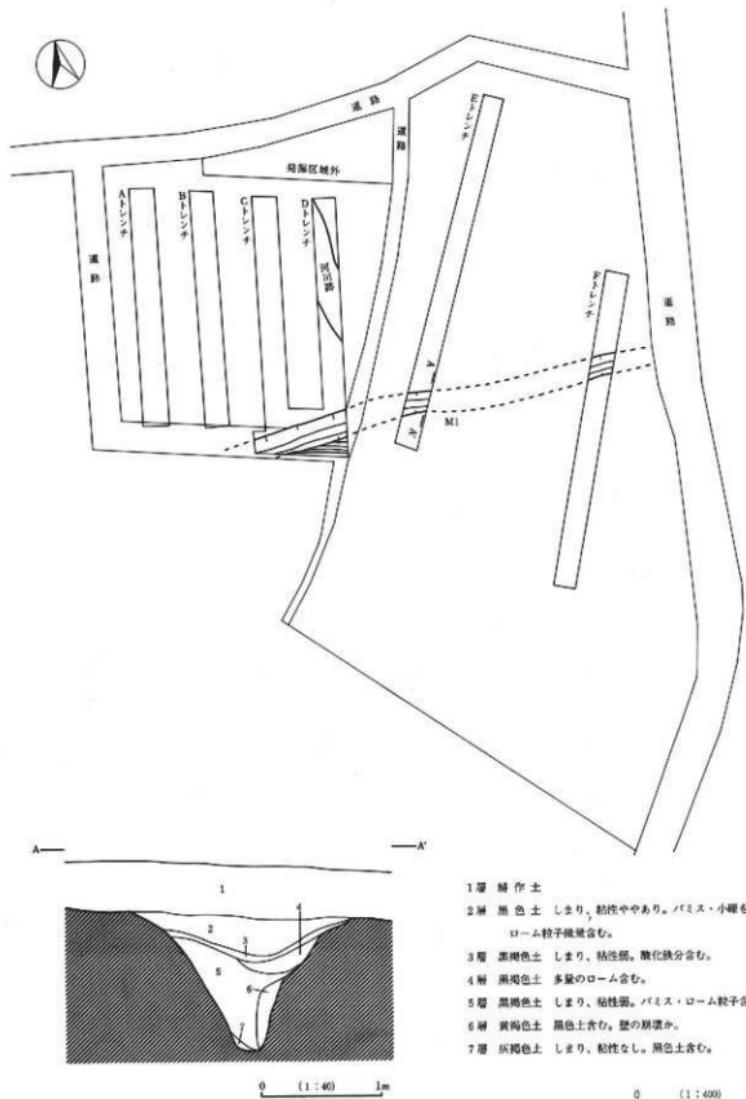
1 大井城跡1号堀址（六供後遺跡M1号）

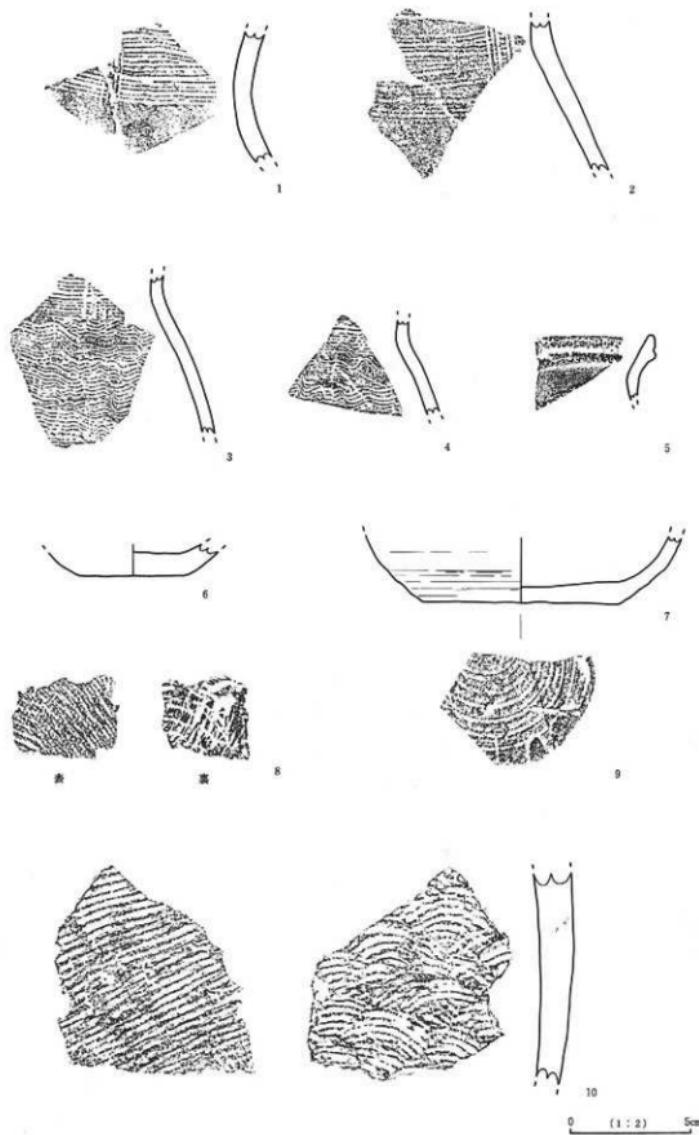
本遺構は、C～Fトレンチより検出された。東西に走り、幅180～220cm、深さ100～132cmを計測、断面形はほぼV字形を呈する。検出状況は、東に浅く狭まり、西に深く幅広くなるが、東側の縫が一段低くなっている。本遺構の両端部は調査区域外のため断定はできないが、東延長線は南北に走る石並城跡の空堀に至るものと思われる。

遺物は第26図に図示したものの他に、Aトレンチ等より内耳土器片、かわらけ片が出土している。第26図1～5は弥生時代後期の壺・甕・高杯形土器、6・8・9・10は須恵器片、7はかわらけの底部片である。1・2がM1号、5がBトレンチ、6・9が河川跡、7がCトレンチ、3・4・8がDトレンチ、10がEトレンチ出土。



第24図 六供後遺跡（昭和55年度調査）層序模式図





第26圖 六供後遺跡（昭和65年度調査）出土遺物実測図

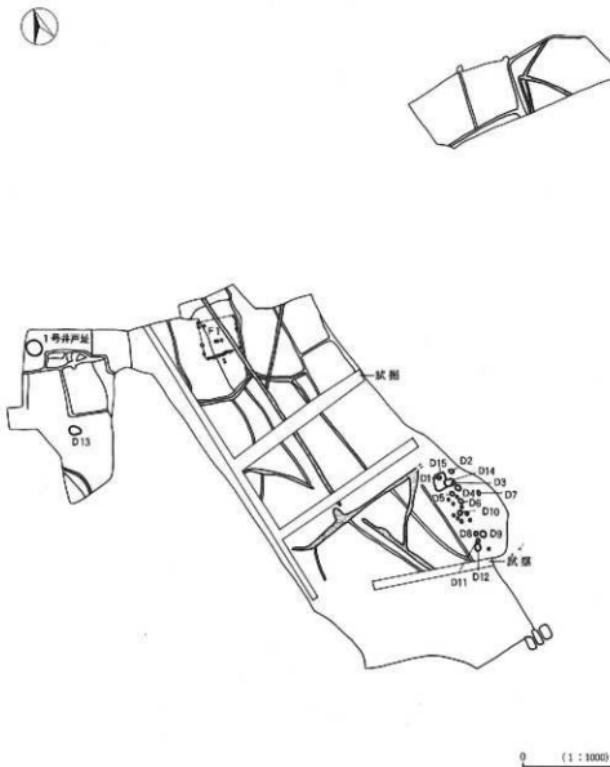
第V章 大井城跡（黒岩城跡第II調査区）

黒岩城跡の東側断崖下の河岸段丘上7.375m²を昭和59年度に調査した。信濃石の西方には、幅2mのトレンチを入れ遺構の確認を行ったが検出遺構はない。信濃石より北部の対象地は、南北にまづ2本のトレンチを入れさらに、東西に直交するトレンチを3本入れ遺構の存在を確めた。

検出された遺構は、建物址1棟、井戸址1基、土坑15基、水田址状遺構である。出土遺物は、下駄1点、かわらけ片、内耳土器片等少量であった。

1 建物址（第28図）

調査区の北部において検出された。規模は、東西8.4m、南北7.3mを測り、南側に入口があるとすると、間口



第27図 大井城跡（昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区）遺構全体図

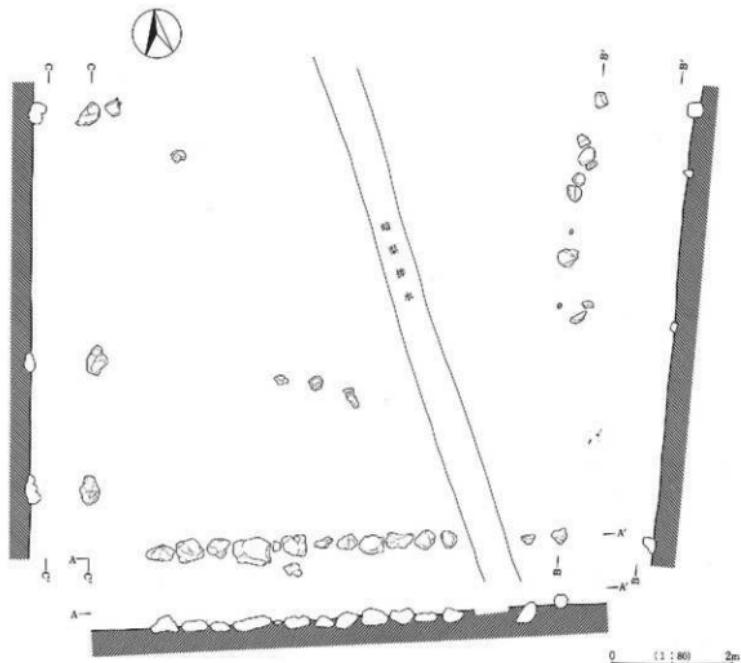
4.5間、奥行4間となる。礎石と思われる大小の礎が34個残っている。南側にもっとも多く15個が一直線に配置されているが、西端にわずかに礎の認められない部分があるが、おそらく2個ぐらいあったのであろう。西側にはわずか3個が残っているがいづれも一直線上にある。北側には2個あるものの、1個は大きく動いたものであろう。東側には北よりに11個と多く残っているが、位置的に若干直線上からずれるものもある。また、南側の礎列から北へ、つまり内部へ2.6m入ったところに3個の礎があって、建物が分けられていたことを示唆するこの仕切られた南側の空間は、土間であったかもしれない。もっともよく残っている南側の礎列の上端のレベルは、8個がほぼ同数値で両端の2個が10cmほど高くなっている。

黒岩城跡の城館に何らかの関連をもつものかどうかは、本址からの出土遺物が無いという状況では、時期等不明といわざるをえない。

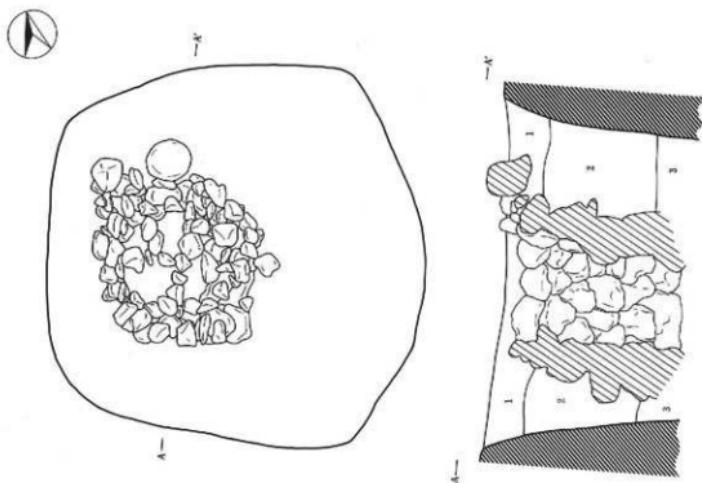
南側礎列の東端から北西に向けて幅60cmの暗渠によって破壊されている。

2 井戸址（第29図）

1号井戸址は調査区の西端より検出された。東西3.1m、南北3.1mの正方形の1辺がふくらむプランを1.6mほど握り下げ、黒色多孔質安山岩等の大小礎を積んだ石組の井戸として構築してある。石組の内径は約90cmを測る。1～3層は、石組の裏詰にされた人為的埋土であり、地山の明褐色灰色土等を埋めている。黒岩城の東側の断崖下には、幾ヶ所かの湧水地点があって、本井戸北も比較的浅いものとなっている。時代を決定する遺物の出土はなかった。



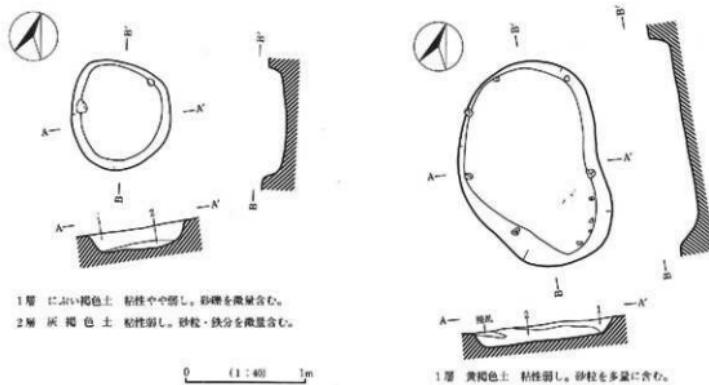
第28図 F1号掘立柱建物址(昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅰ調査区)実測図



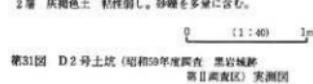
- 1層 黒褐色土 粘性やや弱し。砂礫・鉄分を多量に含む。人為的埋土。
2層 淡灰色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。人為的埋土。
3層 明褐色土 粘性やや弱し。砂粒を多量に含む。人為的埋土。

0 (1:40) 1m

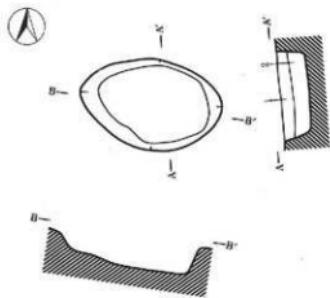
第29図 D1号井戸址(昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区)実測図



第30図 D1号土坑(昭和59年度調査 黒岩城跡
第Ⅱ調査区)実測図

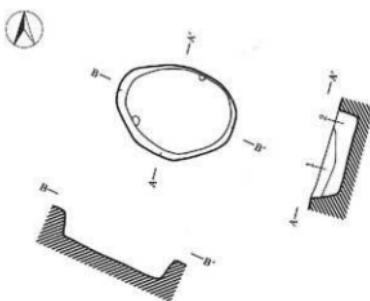


第31図 D2号土坑(昭和59年度調査 黒岩城跡
第Ⅱ調査区)実測図



1層 に bei 黄褐色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。
2層 黑褐色土 粘性弱し。砂礫を少量に含む。

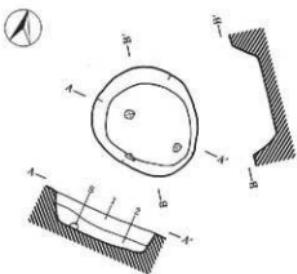
第32図 D3号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区) 実測図



1層 に bei 黄褐色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。鉄分を少量含む。
2層 黑褐色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。

0 (1:40) 1m

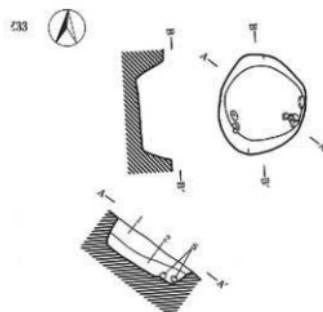
第33図 D4号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区) 実測図



1層 に bei 黄褐色土 粘性弱し。砂礫・鉄分少量含む。
2層 黑褐色土 粘性弱し。砂礫・鉄分少量含む。

0 (1:40) 1m

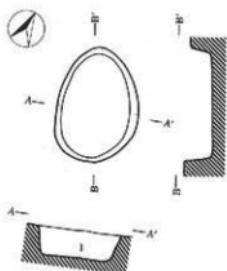
第34図 D5号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡
第II調査区) 実測図



1層 黄褐色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。
2層 黑褐色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。

0 (1:40) 1m

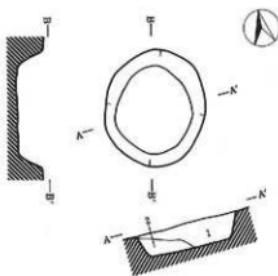
第36図 D7号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区) 実測図



1層 黑褐色土 粘性弱し。砂礫を少量含む。

0 (1:40) 1m

第35図 D6号土坑 (昭和59年度調査
黒岩城跡第II調査区) 実測図

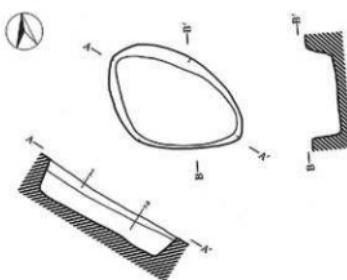


1層 灰褐色土 粘性弱し。砂粒を少量含む。

2層 暗灰色土 粘性弱し。砂粒を少量含む。

0 (1:40) 1m

第37図 D8号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡 第Ⅱ調査区) 実測図

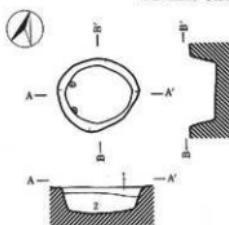


1層 黄褐色土 粘性弱し。砂礫を多量に含む。

2層 灰褐色土 粘性弱し。砂礫を少量含む。

0 (1:40) 1m

第38図 D9号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区) 実測図

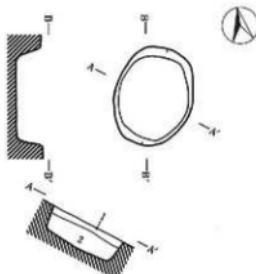


1層 黄褐色土 粘性弱し。砂礫を少量含む。

2層 にじみ褐色土 砂礫を少量含む。

0 (1:40) 1m

第39図 D10号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡 第Ⅱ調査区) 実測図

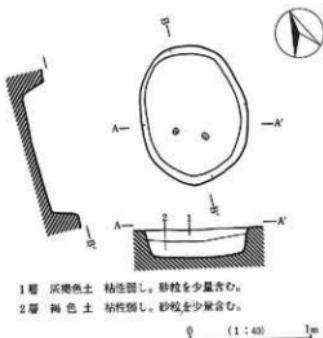


1層 灰褐色土 粘性弱し。砂礫を少量含む。

2層 暗灰色土 粘性弱し。砂礫を少量含む。

0 (1:40) 1m

第40図 D11号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡 第Ⅱ調査区) 実測図

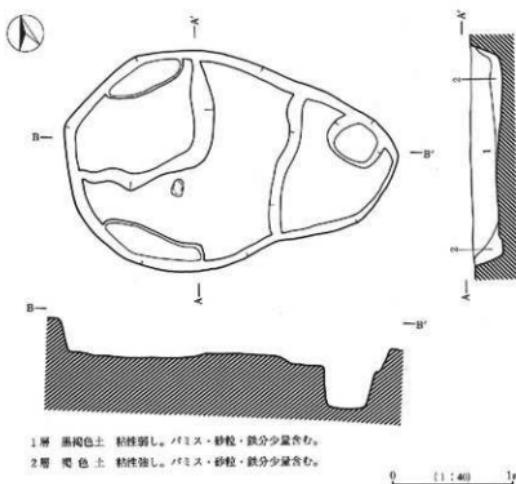


1層 灰褐色土 粘性弱し。砂粒を少量含む。

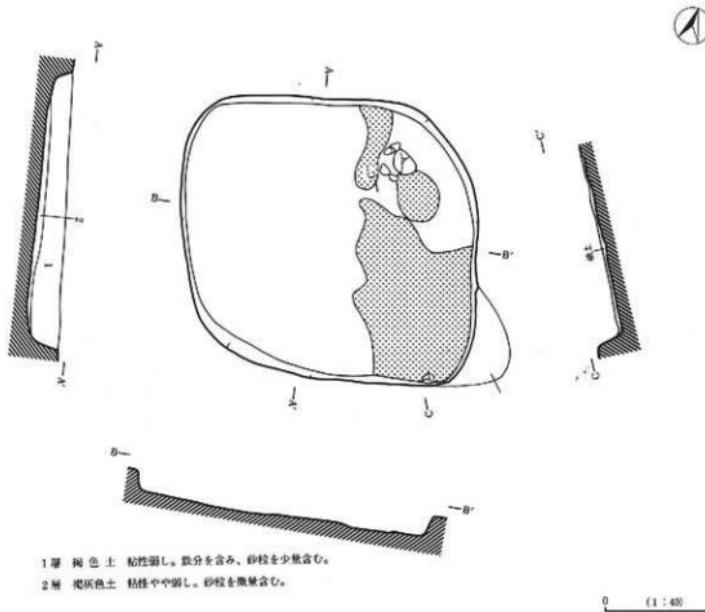
2層 暗灰色土 粘性弱し。砂粒を少量含む。

0 (1:40) 1m

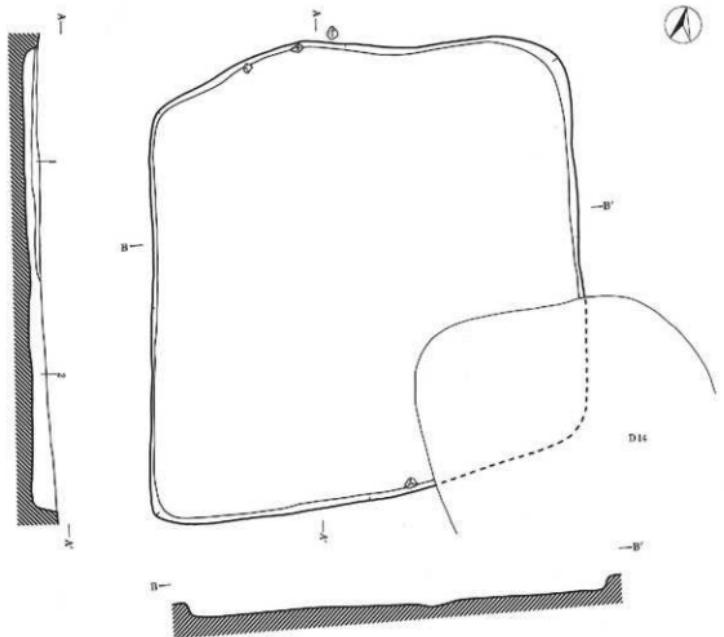
第41図 D12号土坑 (昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区) 実測図



第42図 D13号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区）実測図



第43図 D14号土坑（昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅲ調査区）実測図



1層 緑褐色土 粘性弱し。粒子細く、砂粒を多量に含む。

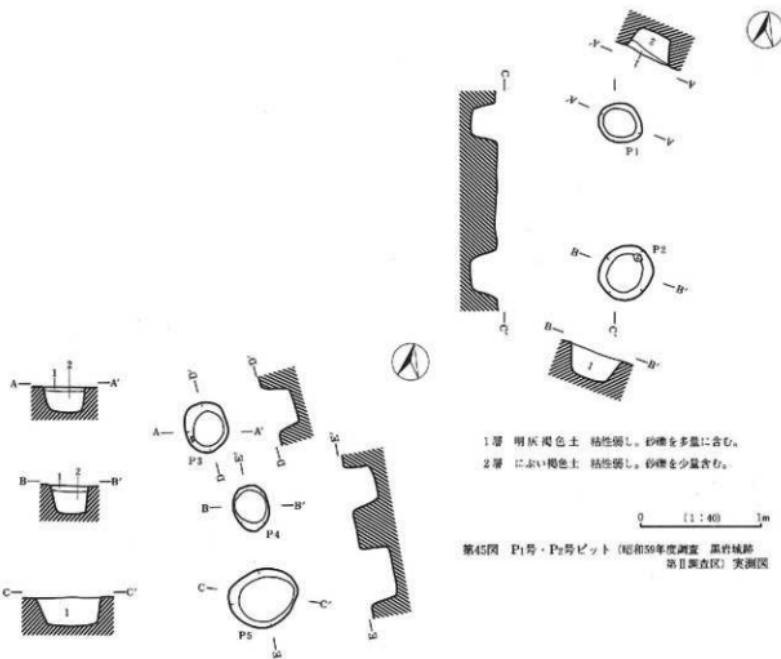
2層 褐色土 粘性弱し。粒子細く、砂粒を多量に含む。

0 1m

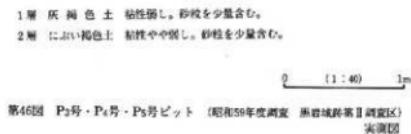
第44図 D15号土坑(昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区)実測図

大井城跡(昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区)土坑一覧表

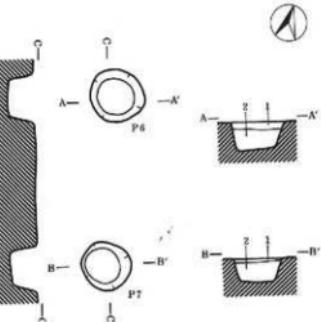
通 務		規 模 (cm)			長 軸 方 位	透 構		規 模 (cm)			長 軸 方 位
		長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ	
D 1		92	84	20	N-53°-W	D 9		124	79	26.5	N-49°-W
D 2		169	114	18	N-40°-W	D10		65	58	22.5	N-68°-E
D 3		100	75	21	N-68°-W	D11		82	64	21.5	N-23°-E
D 4		117	75	25	N-88°-W	D12		116	88	23	N-20°-E
D 5		93	84	24.5	N-58°-W	D13		273	175	64.5	N-71°-W
D 6		94	67	29.5	N-19°-W	D14		244	230	26.5	N-73°-E
D 7		81	71	25.5	N-14°-W	D15		381	353	29.5	N-18°-W
D 8		97	82	22.5	N-13°-E						



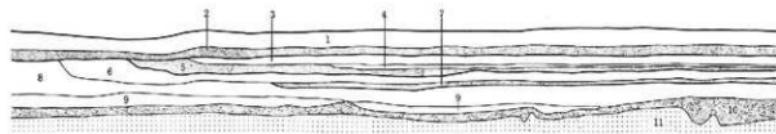
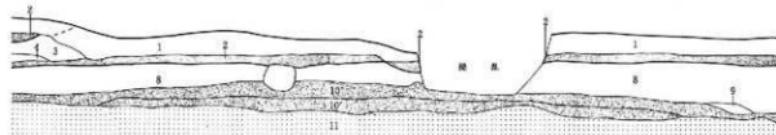
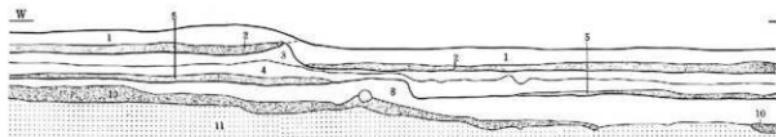
第45図 P1号・P2号ピット (昭和59年度調査 黒岩城跡 第II調査区) 実測図
0 (1:40) 1m



第46図 P2号・P4号・P5号ピット (昭和59年度調査 黒岩城跡第II調査区)
実測図
0 (1:40) 1m



第47図 P6号・P7号ピット (昭和59年度調査 黒岩城跡 第II調査区) 実測図
0 (1:40) 1m



1層 水耕色土 粘性やや強く、粒子細かい。粒分を含む。現在の水田耕作土)

2層 赤褐色土 粘性やや弱く、多くの砂礫と鉄分を含み、粒子粗い。堅い。(現在の水田耕作土)

3層 赤褐色土 粘性やや弱く、少しの砂礫と多くの鉄分を含み粒子粗い。やや堅い。

4層 黑褐色土 粘性やや弱く、少しの砂礫と鉄分を地点状に含む。堅くこもった層(耕作土)

5層 赤褐色土 粘性やや弱く、少しの砂礫と多くの鉄分を粗粒に含む層で2層より堅い。(耕作土)

6層 深赤褐色土 粘性やや弱く、多くの砂礫と少量の鉄分を含む。

7層 赤褐色土 多くの鉄分を粗粒に含み堅い。(耕作土)

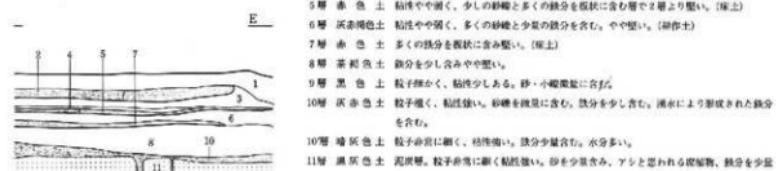
8層 茶褐色土 鉄分を少し含みやや堅い。

9層 黒褐色土 粒子粗かく、粘性少しある。砂・小礫混在に含む。

10層 深赤褐色土 粒子粗かく、粘性強い。砂礫を微量に含む。鉄分を少し含む。海水により形成された鉄分を含む。

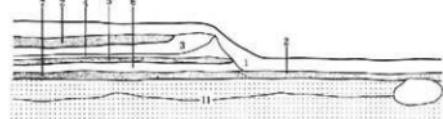
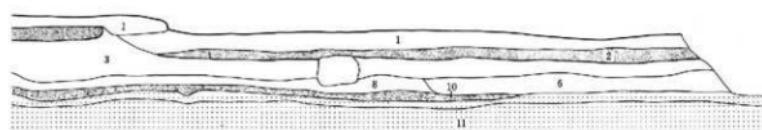
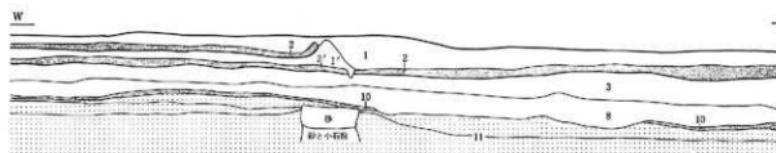
10層 滝灰褐色土 粒子非常に細く、粘性強い。鉄分少含む。水分多い。

11層 黒褐色土 滝灰褐色。粒子非常に細く粘性強い。砂を少含み、アシと混ざる根植物、鉄分を少含む。この層より海水、ベトベトした層。



0 (1 : 60) 2m

第64図 トレンチ4断面図(昭和69年度調査 黒石城跡第Ⅱ調査区)



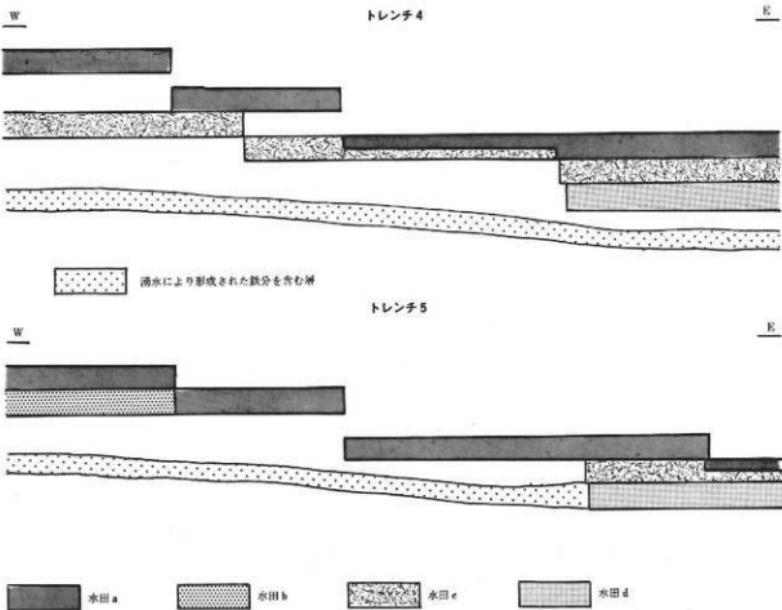
1'層 灰褐色土 稲作土

2'層 赤色土 稻作土

他の層は第48図に同じ。

0 (1 : 40) 2m

第49図 トレンチ5層序断面図(昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区)



第50図 トレンチ4・5層序断面模式図 (昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区)

3 土坑（第30～44図）

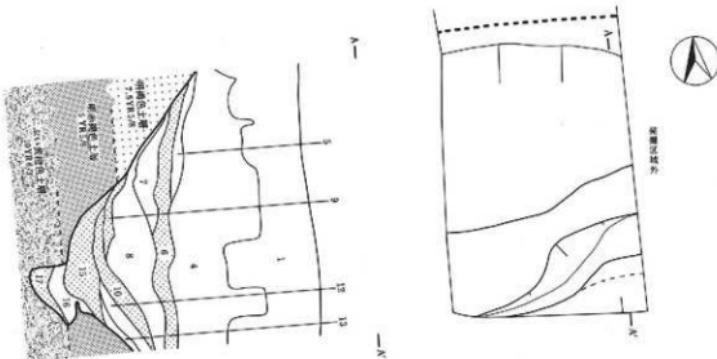
土坑は、調査区の南東部に集中して検出された。規模等は、28頁の一覧表に記した。各土坑の性格や時代を考証するような遺物の出土はなかった。

4 水田址状造構（第27図、第48～50図）

調査対象地内の西部および南・南東部は、他に比してやや高くなっている。これらに囲まれたほぼ中央一帯が北東に続く凹地となっている。この一帯にトレンチを設定し深掘りしたところトレンチ4・5から現在耕作されている水田下に数枚の水田と思われる土層が確認された。第48・49図に示したように4・5・6・7層のように水平にしかも鉄分が堆積している層が確認できた。これらの遺構がどの時代に帰属するのかは、断定し難い遺物また、化学的分析を経ていない現在不明である。また第50図に模式図を描いてみたが、それにそって各床土の形成時期を追ってみると次のようになる。まず、水田d→水田c→水田b→水田a（現在の水田）となる。さらに、細かくみてみると水田cは水田dを埋めてつくられ、水田aは水田cおよび水田bを一部埋めて、一部はそのまま水田c・bの床土面を利用していることがわかる。が、水田aと水田cとの間には第3層が堆積する時間的空白がある、現在の水田が水田dから継続的につくられてこなかったことを窺わしているといえよう。

第VI章 六供後遺跡（大井城跡2号堀址）、 石並城跡（大井城跡3号堀址）の調査

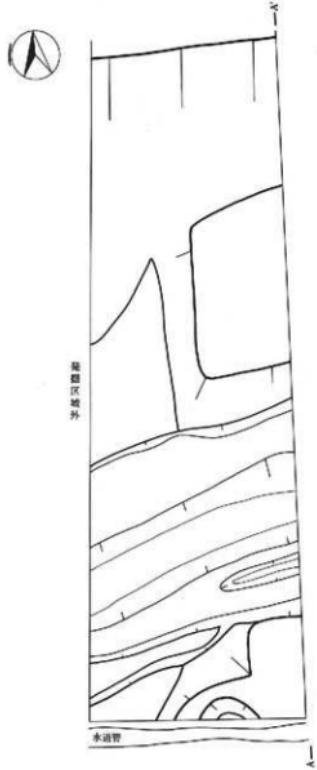
関越自動車道佐久インター供用開始にむけて、佐久地方においては各種の開発が盛んとなっている。関連の事業も大井城跡に近接したところでひんぱんに行なわれている。特に石並城跡の西方や北方に隣接してめだっている。このあたりは、石並城跡の城館西線に平行して南北に走る堀や岩田村北保育園敷地内で検出された東西に走る小規模な堀あるいは、その北に近接して東西に走る堀等が存在し（地表面からも10mぐらいの幅を推察できるような座地）堀の内外からは、関係した遺構の存在が予想され開発事業による破壊の進行が懸念されるところであ



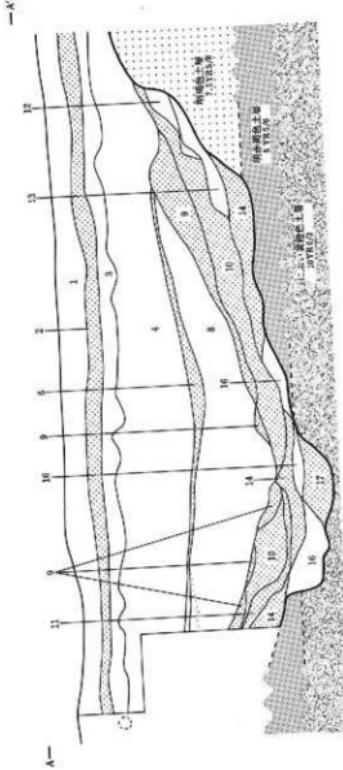
- 1層 暗褐色土 7.5YR 3/4 種作土
- 4層 極暗褐色土 7.5YR 2/3 1cm大のバニス1%含む。
- 5層 暗褐色土 7.5YR 2/3
- 6層 極暗褐色土 7.5YR 2/3 砂を含む。(砂層)
- 7層 黒褐色土 7.5YR 2/2
- 8層 暗褐色土 7.5YR 2/3
- 9層 暗褐色土 7.5YR 3/3 径2cmの小礫を含み、粘性10層より強い。(砂層)
- 10層 黑褐色土 7.5YR 2/2 粒子が細かくヘドロ状の砂、粘性もっとも強い。(砂層)
- 12層 黑褐色土 7.5YR 2/2 7.5YR 5/8の明褐色の地山土を多く含む。
- 13層 棕色土 7.5YR 6/8 7.5YR 5/8の明褐色の地山土を多量に含む。
- 15層 黑褐色土 10YR 2/3 1cm大のバニス・7.5YR 5/8の明褐色の地山の落ち込んだもので、7.5YR 2/2の黒褐色土をブロック状に少量含む。(砂層)
- 16層 明褐色土 7.5YR 5/8 明褐色の地山の落ち込んだもので、7.5YR 2/2の黒褐色土をブロック状に含む。
- 17層 暗褐色土 10YR 3/4 径2cm大の礫を含む粗砂。(砂層)

0 (1:40) 1m

第51図 大井城跡2号堀址（昭和61年度調査 六供後遺跡）Aトレンチ実測図



- 1層 暗褐色土 7.5YR 3/4、耕作土層
 2層 明褐色土 10YR3/4、砂層。
 3層 明褐色土 7.5YR3/4。
 4層 極暗褐色土 7.5YR2/3、1cm大のバミス1%含む。
 5層 極暗褐色土 7.5YR2/3、砂を含む。(砂層)
 6層 極暗褐色土 7.5YR2/3。
 7層 極暗褐色土 7.5YR2/3、径0.2cmの小礫含み、粘性10層より弱い。(砂層)
 10層 黒褐色土 7.5YR2/2、粒子が細かくヘドロ状の砂、粘性もっとも強い。(砂層)
 11層 暗褐色土 7.5YR3/3、径0.2cmの小礫含み、粘性10層より弱い。(砂層)



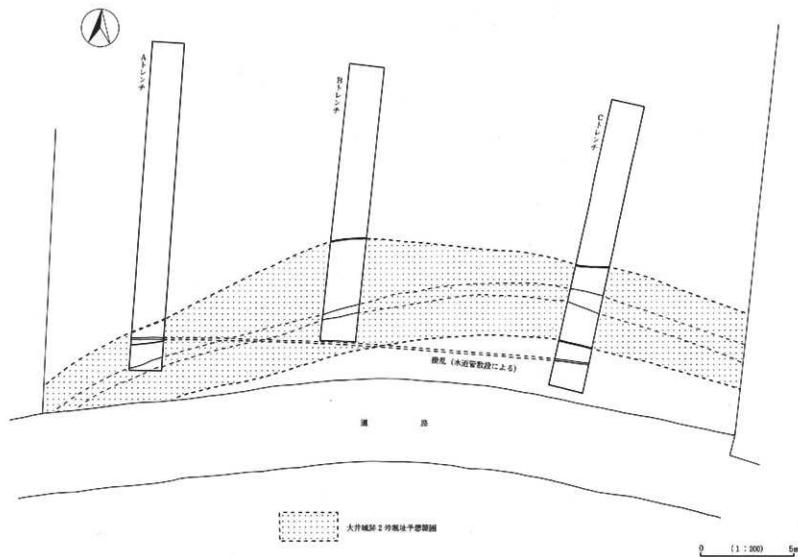
- 12層 黒褐色土 7.5YR2/2、7.5YR5/6の明褐色の塊山土を多く含む。
 13層 棕色土層 7.5YR6/6、7.5YR5/6の明褐色の塊山土を多量に含む。
 14層 明褐色土 10YR3/4、砂層。
 15層 明褐色土 2.5YR5/8、明褐色の塊山土の落ち込んだもので、7.5YR2/2の黒褐色土をブロック状に含む。
 17層 暗褐色土 10YR3/4、径2cm大の砂を含む。粗砂。(砂層)

第52図 大井城跡2号堀址(昭和61年度調査 六供後遺跡)Bトレンチ実測図

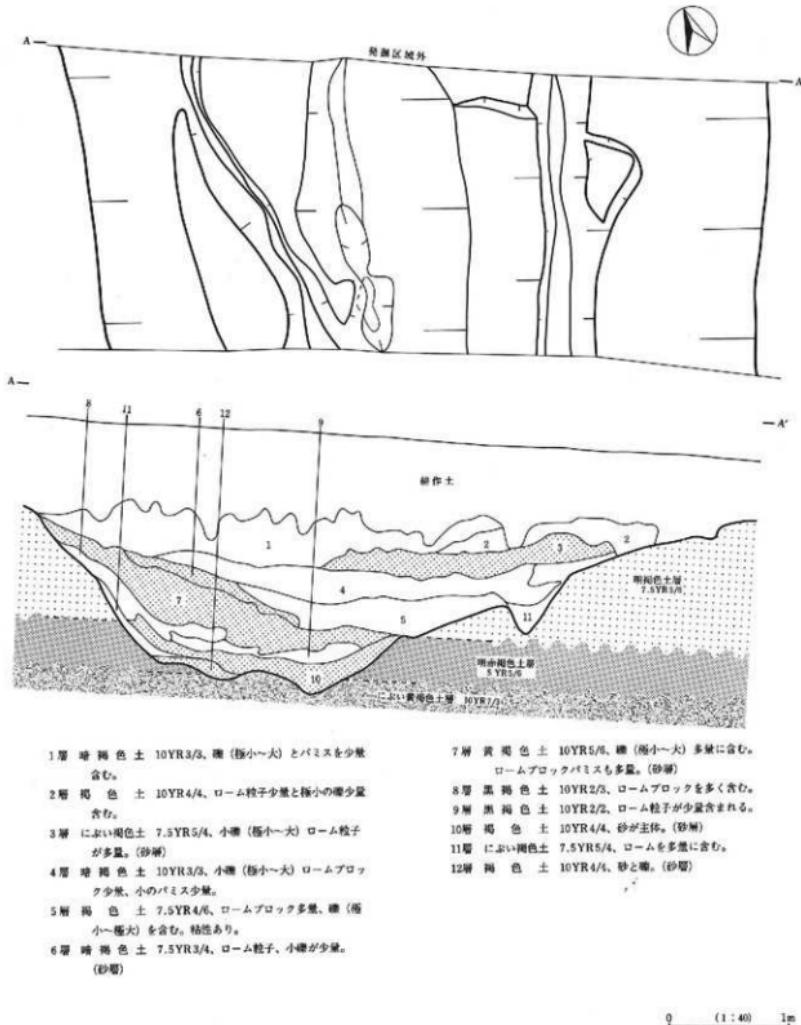
る。

昭和61年度は、これらの堀の一部を調査した。六供後遺跡と石並城跡の西側隣地である。

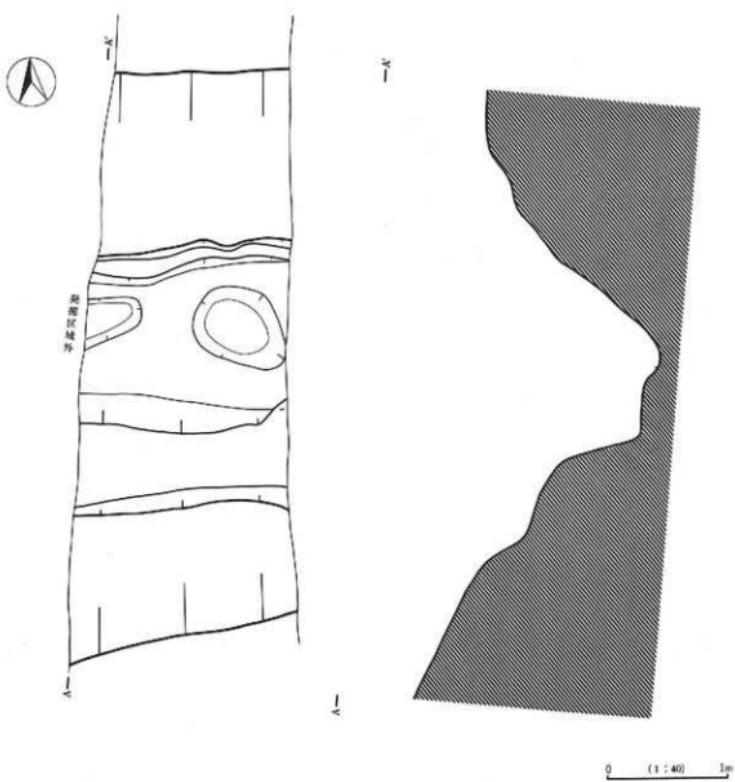
1 大井城跡2号堀址(第51~53、55図)



第533図 大井城跡 2号船跡 (昭和61年度調査 六井後遺跡) 全体図



第54図 大井城跡3号 sondage (昭和61年度調査 石並城跡) 実測図



第55図 大井城跡 2号堀址 (昭和61年度調査 六供後遺跡) Cトレンチ実測図

調査地は、岩村田北保育園の北側で地表より一見して窪地とわかるところである。表面上幅10m、東西の両端は、それぞれ南北方向の崖に交わる。崖面に崩落のあとをみると、崖の延長方向がよくわかる。

確認できたのは、東西25mの範囲であった。A～Cトレンチの各トレンチからは堀は検出できたが、Cトレンチ内でその全幅を把握した。幅は4.6mを計測し、深さは1.6mを測る。断面はほぼU字形をしている。堀の内側の立ち上がりは、中ほどで段状の平坦をもった後緩やかに立ち上がる。土層は17層に細分可能で、少なくとも3回以上のかなりの量の水が流れた跡が砂層としてうかがえる。

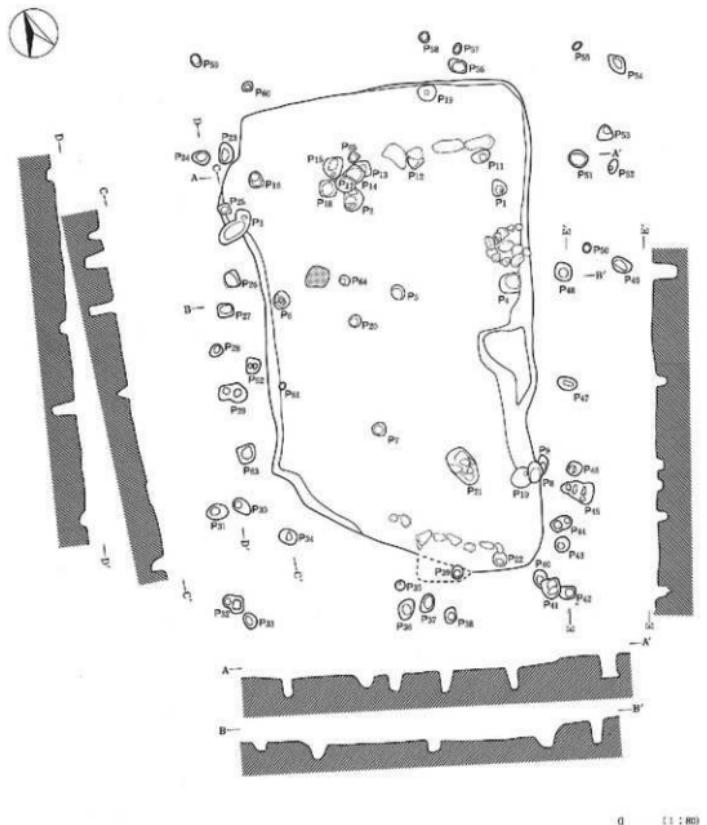
2 大井城跡 3号堀址 (第54図)

石並城跡の南端から、城跡西縁にそって一直線に北へ向けて堀が伸びる。この直線は、王城跡・黒岩城跡の両城跡西側にそうまごとにダイナミックな堀で、約950mの一直線の大きな堀で南北に貫き、3城跡の西側の備えとなっている。調査は、南半分の明瞭な比高差をもった地点はさて北半部のみためには、さほど顕著でない地点をえらんで行った。東西の幅が6m、深さ1.5mを測る。外側は急角度、内側は緩やかに傾斜している。土層は12層に分けられ、2号堀址同様に3回以上のかなりの量の水の流れが観察できる。

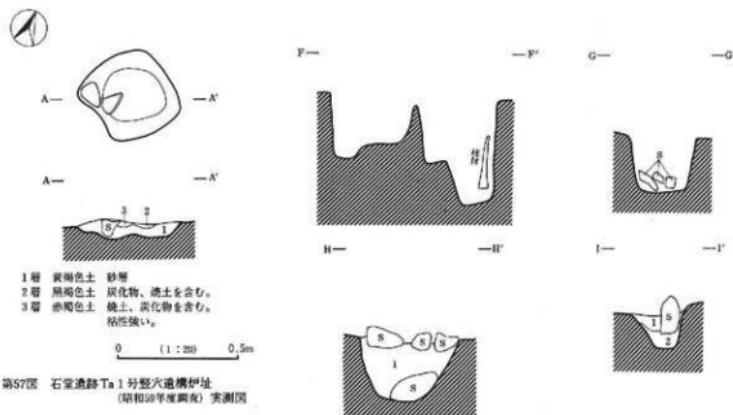
第VII章 石堂遺跡の調査

昭和60年度に市内桜井の石堂遺跡の調査が行なわれた。わずかな面積であったが、中世の堅穴造構が検出されたので、中世堅穴造構の城館内のあり方と比較資料にと考えここに掲載した。

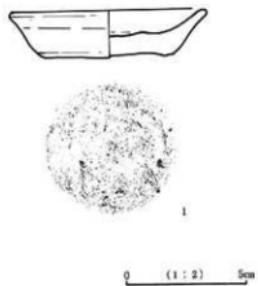
検出されたのは堅穴造構1棟で他には、明確な造構は検出できなかった。規模は、南北810cm、東西510cmの不整長方形を呈し、壁残高は深くて12cmである。柱穴群の検出位置や耕作土の状況から西側がだいぶ破壊をうけており、原形は不整でない長方形とも考えられる。堅穴造構内からは多くの河原石が確認された。南壁下、東壁中央、住居址北側には、何らかの意図で配列したと思われる礫群がある。礫は頗る大きなものからにぎりこぶしのもので、安山岩が大多数で、硬砂岩、砂岩、流紋岩、珪岩、玢岩、玄武岩があり、これらは一般的な千曲川河床礫



第56図 石堂遺跡Ta 1号堅穴造構(昭和59年度調査)実測図



第58図 石堂遺跡Ta 1号窯穴遺構柱穴断面図 (昭和59年度調査)

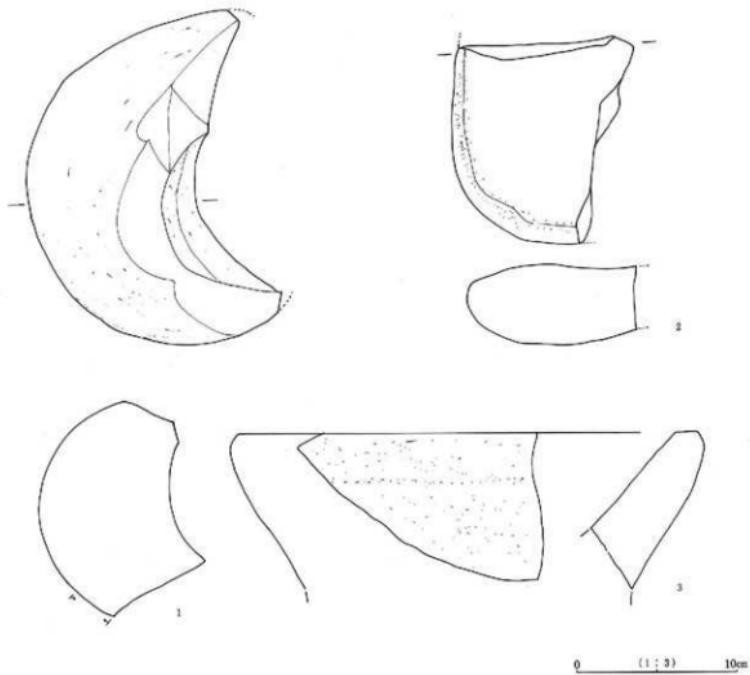


第59図 石堂遺跡(昭和59年度調査)
Ta 1号窯穴遺構
出土遺物実測図

である。安山岩、流紋岩は熱を受けているものがあった。

床面の北側は固められて堅硬であり、礫群下は軟弱であった。南側の破線付近は他に比して堅固で入口部の可能性が考えられる。ビットは65個が検出された。 P_1 と P_2 からは、直立した木材が出土し柱材と考えられる。壁下の位置には、 P_{12} ・ P_{13} ・ P_{14} ・ P_6 ・ P_{41} ・ P_{34} ・ P_{22} ・ P_5 がめぐり、これを平行して壁外にもビットがめぐっており上屋を支えるための柱穴と思われている。なお、 P_{12} ・ P_{13} ・ P_6 ・ P_{21} ・ P_{22} は根石を置いている。また、壁外であるが、 P_{42} ・ P_{43} 等に新旧関係がみられ一部の柱の建てかえがなされたようである。

炉址は、西壁側でやや北寄りで検出された。(第57図)円形を呈し深さは9cmと浅い。焼土層、焼土ブロックが認められた。



第60図 石堂遺跡(昭和59年度調査) Ta 1分竖穴遺構出土遺物実測図

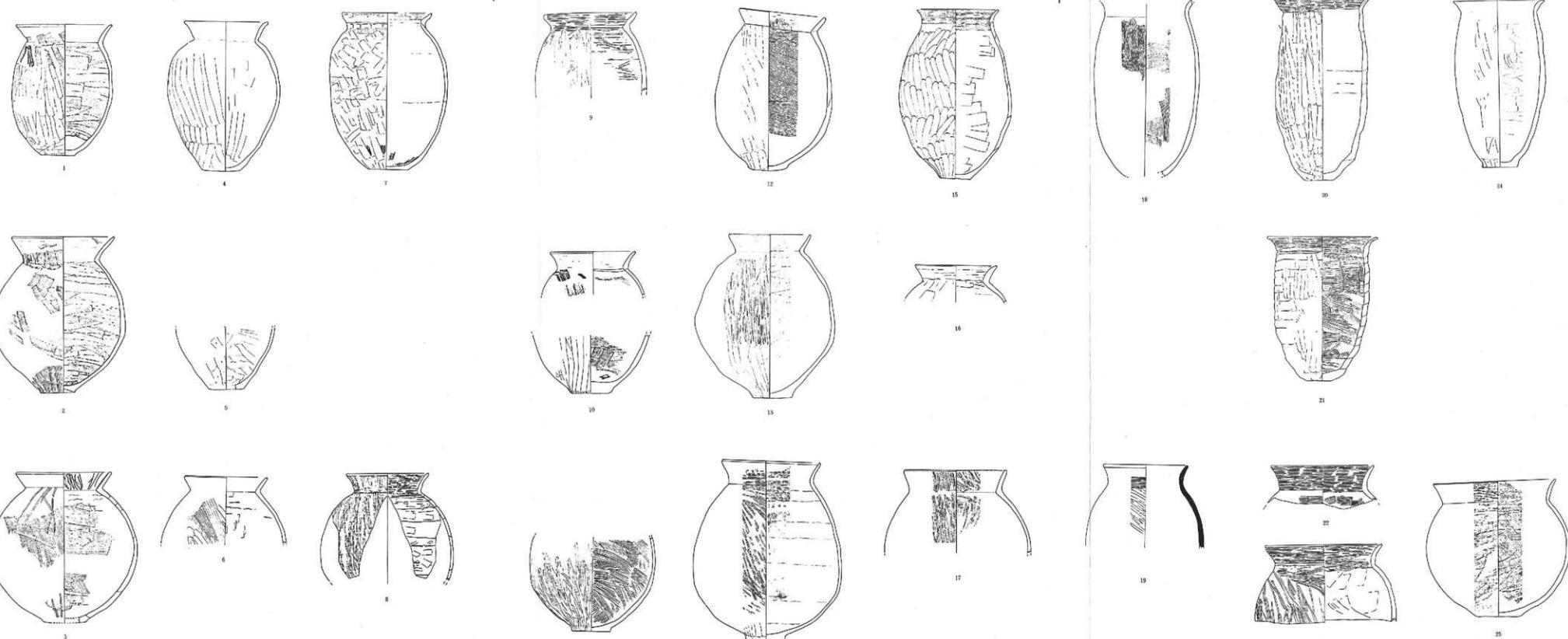
$P_{11} \cdot P_{12} \cdot P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{15}$ は、ほぼ一直線上に並んでいて、やはり、直線的に配された礫と共に間仕切の存在を思わせるものである。

出土遺物は、かわらけ、内耳土器、陶磁器、石臼等がある。(第59・60図) 第59図のかわらけは、北側の床面からの出土である。内耳土器は、器高の低いものと高いもの2者がある。陶磁器片は、瀬戸灰釉鉢、常滑窯があり15世紀の所産である。また、舶載品の青磁碗もみられた。

前 葉

中 葉

後 葉



第61図 佐久地方における古墳時代後期の土器編年(1)
 (1~3大井城跡H2, 4~6下芝宮遺跡H2, 7~8清水田遺跡H1, 9~11清水田遺跡H2, 10大井城跡H3, 12~14大井城跡H11, 15市道跡H4
 16舞台場遺跡H16, 17大井城跡H10, 18大井城跡H13, 19三保遺跡H1, 20~22舞舟北遺跡H4, 23上桜井北H8, 24~25大井城跡H15)

前 葉

中 葉

後 葉



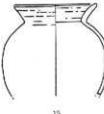
1



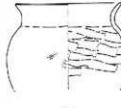
5



10



15



23



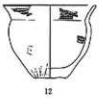
38



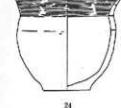
2



6



12



24



29



3



7



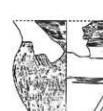
8



14



18



21



26



30



4



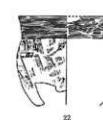
9



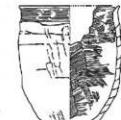
11



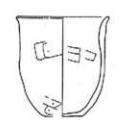
19



22



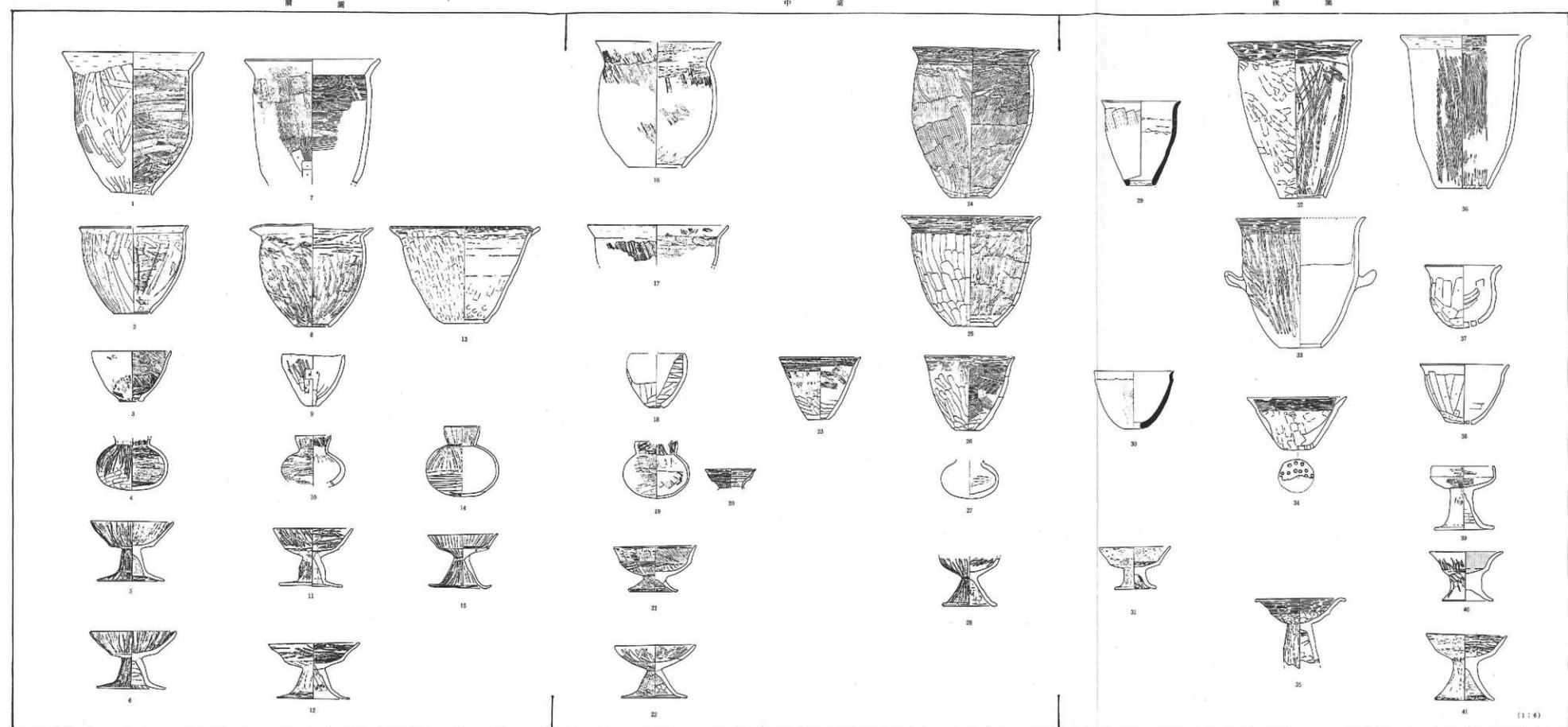
27



31

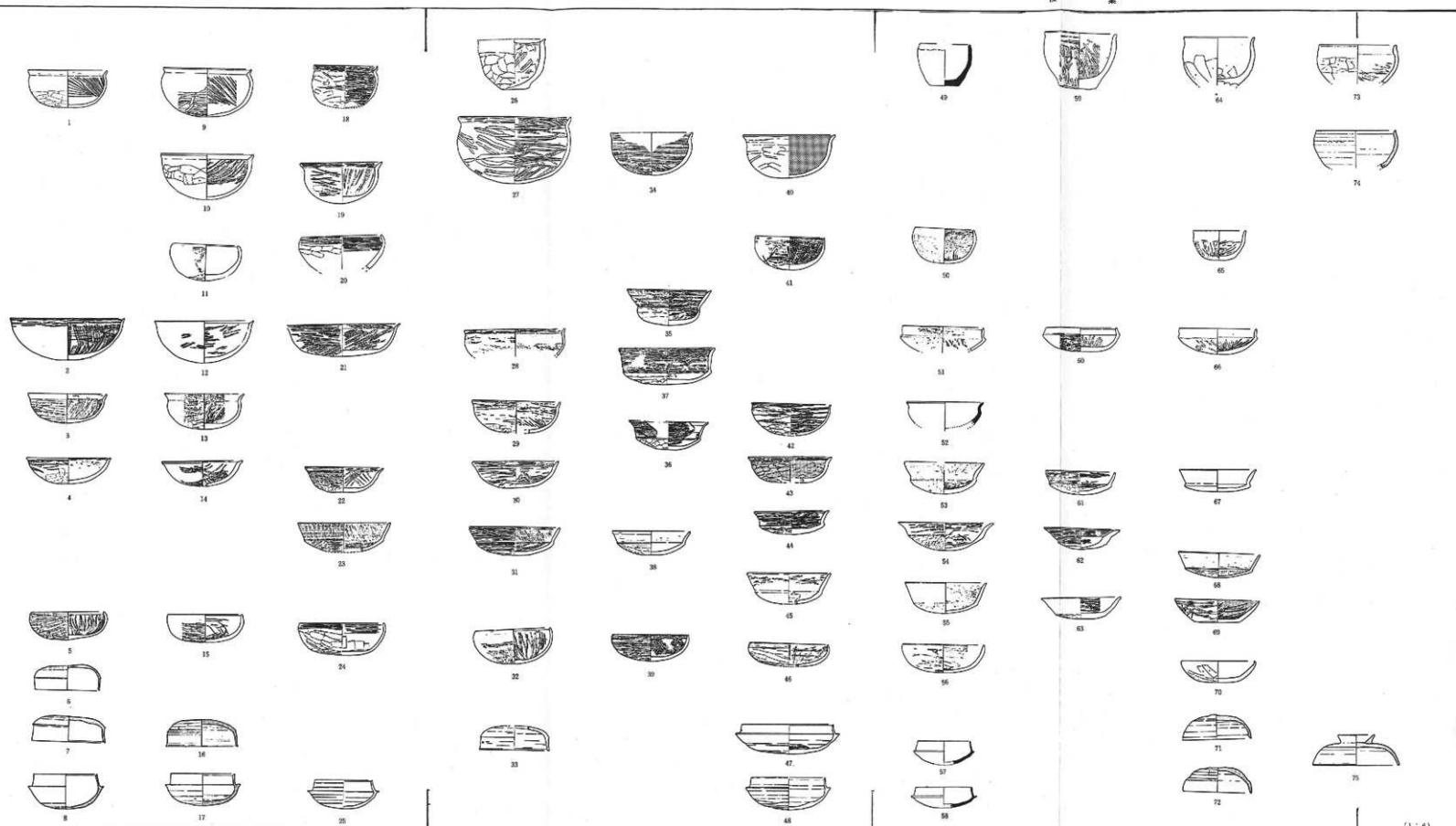
第62図 佐久地方における占墳時代後期の土器編年(2)

1~4 大井城跡 H 2, 5~7 下笠宮遺跡 H 2, 8~9 清水田遺跡 H 1, 10~11 清水田 H 2, 12~14 仲城跡 H 10
15~19 館台山遺跡 H 10, 20~22 館部町田遺跡 H 1, 24~26 館部町田 H 2, 23 下笠宮 H 1, 25 上板井北遺跡 H 8, 28~30 前田遺跡 H 31
29 大井城跡 H 15, 31 前田 H 33



第63図 化久地方における古墳時代後期の土器編年(3)

(1~6大井城跡H2, 7~12下芝宮跡H2, 13~15清水田遺跡H1, 16~17・19大井城跡H3, 18~20~22清水田H2, 23市濱跡H9, 24~25市道H4, 26~27市道H7,
28舞台場遺跡H16, 29~30三塚遺跡H1, 31大井城跡H8, 33佐野町III遺跡H2, 35上桜井北遺跡H4, 36~41大井城跡H15, 37~40清水田遺跡H31, 38~39前田H33.)



第64図 佐久地方における古墳時代後期の土器編年(4)

(1~5大井城跡H2, 6~17下笠原遺跡H2, 18~25押水田遺跡H1, 26~27・35~33押水田H2, 28~29・32大井城跡H3, 34~38大井城跡H11, 35~37・39市道遺跡H9

(40西台遺跡H16, 41大井城跡H10, 42~44・47所道H7, 45~46・48市道H4, 49~52・57~58三塚遺跡H1, 50~51・53~55大井城跡H9, 54~56大井城跡H13, 59~60・63下笠原H1)

(61~62上野井北遺跡H8, 64~65・67~70・72敷田遺跡H31, 66御田H30, 68~69大井城跡H15, 71前田H33, 73前田H40, 74~75御田H48)

付 編

大井城跡出土の獸骨類について

前橋第二高等学校

宮崎 重雄

I. はじめに

大井城跡は、長野県佐久市岩村田町内の千曲川支流の湯川に沿った標高700mの台地にあり、鎌倉時代初期から大井氏の宗家が居城した平山城である。

昭和59年に佐久市教育委員会によって行われた発掘調査で、ウマ・ウシ・ヤギ・シカ・ブタなどの獸骨類と海生の貝類が出土した。このうちヤギは、現在普通に見る明治末に日本に移入されたザーネン系ではなく、在来の矮小型である。日本におけるヤギの最古の記録は1477年の李朝実錄で、沖縄本島にヤギが飼養されていたことが記されている。大井城出土のヤギのなかには中世のものが含まれており、この頃すでに本州にもヤギが飼養されていたことを示す貴重な資料である。

本稿をまとめるにあたり、佐久市教育委員会の林幸彦氏には、数々の有益なご教示を賜わり、国立科学博物館の吉行瑞子氏と埼玉県立自然博物館の吉田健一氏には比較標本でお世話になった。ここで心よりお礼申し上げます。

なお、本稿で用いた調査の基準は以下のようである。

1. 用語は、主に日本獣医学の「家畜解剖学用語」³⁾を用いた。
2. ウマの臼歯の咬合面の名前は、SIMPSON（長谷川、原田）によった。
3. 馬の体の分類は、林田にしたがった。
4. 年令査定は、主にSILVERによった。
5. 注の番号は、本文、図表類とも共通し、引用文献の番号を表わす。
6. Mは国立科学博物館の標本番号を表わす。

II. 記載

1. ウマ（第1・2・3表）

1) 左上頸骨、左下頸骨

左上頸骨とそれに続く頭蓋骨の一部および左下頸骨が残存したものである。犬齒の存在が確認できる、性別は不明である。下頸角はよく発達し、鋭く湾曲して直角に近く、その綾線は鋭くて、血管切痕が深く、東洋種の特徴があらわれている。

本馬の全臼歯列長は、上頸が161.4mm、下頸が165.8mmであり、これを第1表によって、他馬と比較してみると、現在の中型在来馬である。木曾馬の最小馬（上頸162.8mm、下頸167.2mm）⁴⁾より小さい。しかし、小型馬の朝鮮濟州島馬（上頸151.0mm、下頸154.0mm）⁵⁾とトカラ馬（下頸157.0mm）⁶⁾よりはるかに大きく、中型と小型在来馬の中間的な体高（おそらく120cm余）であったと推定される。

奈良末から平安時代にかけての馬とされる佐久市池畠遺跡出土の標本との比較では、本馬は同遺跡の2号馬（上頸166.0mm）、3号馬（下頸167.2mm）より小さいが、4号馬より大きい。また、御代田町野火付遺跡出土の平安時

代馬の3頭（下頸161.0mm、165.5mm、163.0mm³⁾より本馬の方が少し大きい。群馬県の平安時代馬との比較では、佐波郡境町十三宝塚遺跡出土の馬（上頸169.4mm、下頸171.6mm¹⁹⁾）および群馬郡猿東村大久保A遺跡出土の2号馬（上頸169.4mm、下頸171.0mm²⁰⁾）よりは幾分小さいものの、大久保Aの1号馬（下頸155.6mm¹⁹⁾）はだいぶ上回る。

いずれにしても、本馬は奈良末から平安時代に、長野県、群馬県に飼育されていた馬の平均（上頸164.7mm、下頸165.3mm）より上頸でわずかに劣るもの、下頸ではほぼ等しく、この頭の馬の平均的なものに近い馬格の個体であったといえる。

2) 標本番号27、左下頸臼歯（H13号住居址）

下後錐と下後附錐が完存し、下原錐、下次錐の一部が残存する。成獣のものである。

3) 標本番号37、右上頸第三後臼歯（しー7グリッド） 時代不明

未咬耗の右上頸第三臼歯で、4才前後の個体と推定される。長野県、群馬県の奈良末から平安時代の馬の5頭の平均29.0mmにかなり近い歯冠長を有し、歯冠長幅指數（77.2）は池畠遺跡馬のいざれ（85.3、86.7、80.7）より小さいが、群馬県の平安時代馬の2個体（76.1、69.8）よりは大きい。

4) 標本番号38、右上頸臼歯（T_a26号堅穴遺構） 15、16世紀

頬側の歯冠エナメルを欠く、歯冠高の値から10才余の年令が予想される。

5) 標本番号39、右下頸臼歯（D29号土坑） 時代？

完存する右下頸の臼歯で、歯冠高の値から10才弱の年令が予想される。

6) 標本番号40、右上頸臼歯（T_a40号堅穴遺構） 15、16世紀

歯冠セメント質の大部分を欠いているが、その他はほぼ完存する。10才余の個体と思われる。

7) 標本番号46、右下頸臼歯4個（H13号住居址） 古墳時代

① 右下頸第三大臼歯

歯冠セメント質をほとんど欠くが、ほぼ完存する。本馬は歯冠長が30.4mm、同幅が11.6mmあり、長野県および群馬県の奈良末から平安時代馬の10頭分の平均31.5mmを少し下回る値を示す。

② 右下頸臼歯

近心側歯根部と歯冠セメントの約1/2を欠くが、他はほぼ完存する。

③ 右下頸臼歯

歯冠セメントの約1/2を欠く他はほぼ完存する。

④ 右下頸臼歯

歯根側の約半分の歯冠部が残存したものである。

これら4個の歯は、大きさ、色調、出土地点などから同一個体のものと見られ、10才前後の中型在来馬相当の馬格が予想される。

2 ウシ（第4表）

1) 標本番号47、右下頸骨（えー6グリッド） 時代？

第三後臼歯が残存し、第二後臼歯は歯槽のみ残存する右下頸骨の破片である。遠心側の補足錐は咬合面まで達しておらず、未咬耗である。第三後臼歯は歯冠長（以下長と略す）が38.3mm、歯冠幅（以下幅と略す）が15.0mmあり、池畠遺跡の家牛の長38.2mm、幅14.8mmとはほぼ同じ大きさであり、長崎県壱岐出土の赤生牛4頭の平均（長37.5mm、幅14.0mm¹¹⁾）よりわずかに大きい。しかし、同じ赤生牛でも東京都の伊豆子貝塚遺跡出土の家牛の長39.5mm、幅13.7mm¹²⁾には劣る。また、日本古代の家牛の源流とされる見島牛¹³⁾およびロ之島牛¹⁴⁾との比較では、前者の雄にも雌にも劣るが、後者の雌よりははるかに大きい。さらに現生の黒毛和牛の雌雄をも上回っている。

第1表 馬全臼齒列長計測値比較表

(単位 mm)

標 本	時 代	上顎全臼齒列長	下顎全臼齒列長
大 井 城	中世?	161.4	165.8
池 頭	1号馬	奈良～平安	166.0±
	2号馬		
	3号馬		
	4号馬		152.7
	5号馬		114.8
大久保 ¹⁸³ A OAII 2号馬 OAII 3号1号馬	平安	169.4	173.0
			155.6
十 三 宝 球	々		
野 大 付	1号馬	々	161.0
	2号馬		165.5
	3号馬		163.0
	4号馬		166.2
木 曾 馬	最 大	現 世	184.0
	最 小		162.5
	平 均		173.2(N=6)
ト カ ラ フ 馬	々		157.0
清 州 島 馬	々	151.0	154.0

第2表 下顎骨計測値

(単位 mm)

	第二前臼齒	第三前臼齒	第四前臼齒	第一後臼齒	第二後臼齒	第三後臼齒
下 頸 高 度	57.8 27.9	71.2 27.3	75.6 25.6	80.1 25.8	83.7 25.4	99.4 26.8
下 頸 角 の 長 さ 槽 間 距 の 長 さ 第三臼齒—下頸角の長さ			25.7 68.6 116.0			

第3表 馬臼齒計測値一覧表

(単位 mm)

時代	標本	部位	第2前臼齒	第3前臼齒	第4前臼齒	第1後臼齒	第2後臼齒	第3後臼齒
中 世 ?	大 井 城	上顎 下顎 No.37 No.46	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	34.6 23.0 42.2 66.5	27.7 25.1 43.2 90.6	27.3 25.2 43.2 92.3	24.6 26.2 24.0 106.5	25.0 24.0 26.2 96.0
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	33.9 14.3 42.2	27.4 16.2 59.1	25.4 16.0 63.0	24.3 14.4 59.3	24.8 13.7 55.2
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高					31.9 12.7 39.8
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高					29.4 22.7 39.4+
新 良 平 安	馬	1号馬 (上顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	35.8 21.8 33.6 60.9	29.5 23.4 36.7 79.3		24.3 21.8 79.7 89.7	26.7 22.3 59.6 83.5
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	28.0+ 16.5	28.6 26.3 29.3 92.0	26.0 26.2 38.4 100.8	23.9 26.3 32.3 110.0	24.5 25.6 40.2 104.5
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	34.0 22.7 22.0 66.8	27.1 24.7 31.4 91.1	24.2 25.3 37.0 105.0	21.2 25.3 31.0 119.3	22.2 23.1 38.6 104.1
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	31.8 14.2 24.8	26.7 16.4 29.3	25.8 16.6 38.7	24.2 15.2 33.7	25.1 14.3 44.9
		4号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					34.2 12.3 37.3
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					25.4 20.5 37.4
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					20.7 37.4 80.7
		5号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					28.0 11.4 24.0
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					20.5 12.1 30.1
			曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					28.0 11.4 30.1
平 安	OAI II 2号馬 (上顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	38.8 24.5 63.1	28.3 27.4 96.8	27.3 27.0 98.9	24.5 26.4 107.8	26.1 25.2 96.6	30.6 23.3 76.1
		曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	33.2 14.7	28.0 16.2	27.4 16.1	25.4 14.9	27.2 14.1	34.4 13.5
		OAI II 2号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	30.1	24.8	23.6	21.4	22.2
		OAI II 2号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數					31.0
	四十三室 豪	上顎	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	37.7 23.8 63.1	30.7 26.7 87.0	27.6 25.8 93.5	25.8 25.4 98.4	26.2 23.6 90.1
		下顎	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	32.2 14.1	28.8 16.4	28.2 14.6	25.4 14.3	26.6 14.3
	野 火 付 馬	1号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	31.4	26.0	24.0	21.7	22.2
		2号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	33.7 15.0	28.8 17.7	26.2 16.5	26.0 15.7	26.2 13.5
		3号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數	31.0 14.4	25.7 16.4	25.9 16.3	22.5 16.3	23.6 14.0
		4号馬 (下顎)	曲冠長 曲冠幅 曲冠高 長幅指數		27.6 16.1	25.0 15.2	26.3 13.8	24.4 14.4

第4表 ウシ、第三後臼歯計測値・比較表

(単位 mm)

遺跡名	大井城	池	畠	巻	伊	見	口之島	黒毛和牛
性別	?	?	?	?	♀♂	♀♂	♀♂	
時代	不明	奈良末～平安						
計測部位								
歯冠長	38.3	38.2	37.5	39.5	39.6 42.4	35.1 41.0	37.1 36.9	
歯冠幅	15.0	14.8	14.0	13.7	16.0 16.3	13.0 15.7	15.2 15.8	
歯冠高	25.3	23.1		23.4	21.2	22.2 20.2	21.8 18.0	

* 4頭の平均 ** 左右の平均

3. ヤギ (第5・6・7・8・9・10・11・12表)

ヤギの家畜化は、BC7000年頃より、イラン、イラク国境のザクロス山の山麓あたりで始まった。家畜化の過程で、ヤギの四肢骨は野生のものよりかなり小さくなり、例えば140mmほどの中足骨が100mmまでになった。¹³⁾ わが国のヤギに関する記録は、1477年の李朝記録で、この頃すでに沖縄本島で、ヤギが飼われていたことを示している。現在、奄美、琉球を経て台湾に至る島々には有色有角の体高50cm内外の矮小ヤギが飼養されている。ヤギは古来、遠洋航海の非常用食糧として生きたまま船積みするのに好適な動物とされており、このような形で日本の南西諸島に持ちこまれたのであろうといわれる。

大井城跡出土のヤギは、矮小型で、少なくてその一部は中世のものであり、本州でもすでに中世にはこの型のヤギが飼われていたことが判明し、きわめて重要な資料であるといえる。なお、本州で普段見かけるヤギはザーネン系で、スイスを原産とし、明治の末年以來輸入されたもので、在来と矮小型とは別系統の白色の大型種である。

1) 標本番号9、左距骨(ニー3グリッド) 時代不明

中心第4足根骨の内側の関節面と距骨滑車の外側底部を欠損する他はほぼ完存する。いずれの計測値も亜成獣のザーネン系より少し小さい。

2) 標本番号26、左上腕骨(T.19号竪穴遺構) 時代15、16世紀

左上腕骨の遠位約2/3が残存し、遠位骨端の掌側に破損がある。現生の亜成獣のザーネン系に比べると、いずれの計測値でも標本の方が小さい。

3) 標本番号28、左中足骨、頸椎破片2(えー11グリッド) 時代不明

① 左中足骨は近位約2/3が残存し、近位骨端の底側に破損がある。各計測値は亜成獣のザーネン系より小さいが、本遺跡出土の標本番号44の中足骨よりはわずかに大きい。キバノロやキヨンなどのシカ科の動物では、中足骨の背側あるいは底側の從溝が深くなり明瞭に発達しているが、本標本では浅くて不明瞭である。中足骨長に対する各横径の計測値の割り合いも両者で異なっていて、シカ科の方が全体的に細長い。

② 頸椎は2片あり、棘突起、前関節突起などを保存するが、どの頸椎であるかの決定はできない。

4) 標本番号44、左上頸骨、左踵骨、左中足骨、基節骨2(D46号土坑) 中世?

① 左上頸骨、第2前臼歯から第2後臼歯までが残存する左上頸骨で、咬耗度から若い成獣のものと判断される。シカ科のものに比べて歯冠長幅指数が小さく、それは同じウシ科のカモシカにも共通している。

② 左踵骨

載距突起にわずかに損傷があるものの、ほぼ完存している。

③ 左中足骨

遠位端の外側の滑車部背面に破損のある他はほぼ完存する。滑車部は骨体に接着し、2才以上の成獣のもので

あることがわかる。中足骨長はザーネン系の亜成獣のヤギよりも小さいが、国立科学博物館のM1868の雄の亜成獣よりは大きい。中足骨長に対する近位最大横径、遠位最大横径の割り合いは、どのヤギよりもやや小さく、細めのあしをしていたことができる。しかし、シカ科のキバノロやキヨンほどではない。

④ 基節骨 2

1対のほぼ完存する2個の基節骨で、上記の中足骨とうまく関節する。

5) 標本番号45、右下頸(さー6グリッド) 時代不明

第四乳臼歯と第一後臼歯が植立し、第二と第三乳臼歯は破損して、歯根だけを歯槽内に残す。また、第二後臼歯は下顎骨内に埋存し、下顎骨は下頸枝と下頸結合を欠く。歯の生えかわりの程度から1.5才程度の年令が予想される。本標本は、国立科学博物館のはば同年令のヤギ(M1868)と第四乳臼歯、第一後臼歯ともはば同じ大きさであるが、わずかに大きい。また、下頸体高、下頸体厚でも、本標本の方がわずかに大きい。

第5表 ヤギ、上顎臼歯計測値・比較表

(単位 mm)

		第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯
大井城 No.44	歯冠長	6.4	8.4	9.3	12.5	15.4
	歯冠幅	5.7	6.7	8.1	11.0	10.8
	歯冠高	11.9	12.7+	13.8+	13.5+	23.0
	長幅指数	89.1	79.8	87.1	88.0	70.1
ヤギ♂ M1868	歯冠長		7.1	10.0	10.6	14.2
キヨン M♀ 10102	歯冠長	8.2	7.1	6.9	8.9	9.7
	歯冠幅	7.7	8.0	7.7	8.6	9.5
	長幅指数	93.9	112.7	111.6	96.6	96.9
ホエジカ M♂ 16462	歯冠長	10.6	8.8	7.8	9.5	10.2
	歯冠幅	9.1	10.7	11.0	11.6	12.5
	長幅指数	85.8	121.6	141.0	122.1	122.5

ヤギ♂ M1868は亜成獣(1.5才±)

第6表 ヤギ下顎臼歯計測値・比較表 (単位 mm)

		第4乳臼歯	第1後臼歯
大井城 No.45	歯冠長	15.8	14.3
	歯冠幅	6.3	6.6
	歯冠高	7.8	8.3
	長幅指数	39.9	46.6
ヤギ♂ M1868	歯冠長	13.5	12.8
	歯冠幅	6.5	6.6
	長幅指数	48.1	51.6
ホエジカ M16462	歯冠長		9.5
	歯冠幅		7.2
	長幅指数		75.8
キヨン M10102	歯冠長		8.4
	歯冠幅		5.7
	長幅指数		67.6

ヤギ♂ M1868は1.5才±

第7表 ヤギ下顎骨計測値・比較表 (単位 mm)

		下顎体高	下顎体厚
大井城 No.45	第4乳臼歯で	19.0	9.8
	第1大臼歯で	19.9	12.1
	第2大臼歯で	26.6	9.8
	第4大臼歯で	16.3	8.4
ヤギ♂ M1868	第1大臼歯で	19.7	11.5
	第2大臼歯で	23.5	10.4

第8表 ヤギ上腕骨計測値・比較表 (単位 mm)

	大井城No26	ザーネン系
保存最大長	75.6	
骨体中央横径	12.6	13.1
骨体中央前後径	16.0	18.8
達位最大横径	27.3	30.8
達位最大前後径	17.6+	27.6

第9表 ヤギ脛骨計測値・比較表 (単位 mm)

	大井城No44	ヤギ♂	ザーン M17259
最大長	52.4	46.5	37.2
最大幅	17.1	15.6	

大井城以外は亜成獣

第10表 ヤギ距骨計測値 (単位 mm)

	大井城No 9	ザーネン系
外側最大長	32.5	32.9
内側最大長	29.2+	30.1
外側最大前後径	17.4	17.4
達位端最大横径	20.7+	21.3

ザーネン系は亜成獣

第11表 ヤギ中足骨計測値・比較表

(単位 mm)

	大井城		ザーネン系	ヤギ	チャウセンキバノロ	キヨン
	No44	No28				
中足骨長	115.5			123.8	83.7	81.7
近位最大横径	19.6	20.6		22.3	18.3	12.0
中足骨長に対する同横径	17.0			18.0	21.9	14.7
中足骨長に対する同前後径	17.7	17.1+		19.4	16.9	10.8
骨体中央横径	11.5	12.7		11.7	10.1	7.5
骨体中央前後径	10.3	10.4		9.7	7.8	7.7
達位最大横径	20.1			25.2	21.2	18.9
中足骨長に対する同横径	17.4			20.4	25.3	14.8
中足骨長に対する同前後径	10.6			16.0	14.5	12.4
長軸指数	10.0			9.5	12.1	9.2

比較標本はすべて亜成獣、なかでもザーネン系とM1868♂は1.5才程度

第12表 ヤギ後肢基節骨計測値

(単位 mm)

	基節骨長	近位横位	近位前後径	骨体中央横位	骨体中央前後径	達位横位	達位前後径
大井城 左 No44 右	36.6 37.0	11.0 11.0	13.0 13.6	8.6 8.5	8.6 9.4	9.4 10.6	10.6 10.0
ヤギ ♂ キヨン M17259 ♂	30.0 19.2	10.3 7.0	12.0 8.3			8.7 5.7	7.0 5.0

4. シカ (第13・14・15・16表)

1) 標本番号6、中足骨 (かー4グリッド) 時代不明

中足骨骨体部の破片で、保存全長は41.0mmである。

2) 標本番号19、左橈骨 (H12号住居址) 中世?

橈骨の近位部が残存したもので、足尾山地産の現生のオスとほぼ同じ大きさである。

3) 標本番号24、中足骨破片2 (きー4グリッド) 時代不明

中足骨の遠位骨体の破片と骨体底部の破片である。骨体の横径、前後径とも足尾山地産の現生のオスより大きい。

4) 標本番号32、角 (<ー5グリッド) 時代不明

角座から遠位68.2mmまでが残存する枝分のしないソロッポである。このため年令は2才と予想され、角の完成度から死亡時期は秋と考えられる。保存全長は68.2mm、遠位断面の径は20.6×17.6mmである。

5) 標本番号34、大腿骨破片 (かー8グリッド) 時代不明

骨体の近位部の半分が残存したもので、保存全長は95.9mmである。骨体中央の径は18.4×19.8mmで、足尾山地産のオスの成獣の20.2×21.7mmより少し小さい。

6) 標本番号35、左橈骨 (D88号土坑) 中世?

橈骨の近位部が長さ139.1mmだけ残存したもので、標本番号19の左橈骨とはほぼ同じ大きさであり、足尾山地産の現生のオスにも近い大きさである。

7) 標本番号36、下顎後臼歯2 (T₃38号竪穴遺構) 中世?

左下顎の第2後臼歯、第3後臼歯が残存したもので、歯槽部の骨が多少残存している。歯の大きさは足尾山地産の現生のオスに比べてだいぶ大きい。

8) 標本番号49、左角、右中足骨 (D160号土坑) 中世?

① 左角は第一枝分岐部が残存したもので、第一枝の分岐部の直下で横に切断し、角幹は分岐点から4cm上を斜め後下方に切断し、第一枝は分岐点から4cm上を斜め前下方に切断し、さらに第一枝は前方から二等分され、角幹にいたったところで、内側からその方向に切りこんで、第一枝の内側半分を切り取っている。だいぶ大きいシカ角である。

② 右中足骨は近位部の底側半分が保存全長で115.5mm残存したものである。骨体横径でみると、足尾山地産の現生のオスよりだいぶ大きく、標本番号24のシカより大きいように思える。

第13表 シカ臼歯計測値 (単位 mm)

		大井城No36	足尾山地 現生♂ ^a
下顎第2後臼歯	歯冠長	20.9	17.5
	歯冠幅	12.8	10.8
	歯冠長	26.8	22.2
下顎第3後臼歯	歯冠幅	12.8	10.3

第14表 シカ橈骨計測値・比較表 (単位 mm)

大井城	足尾山地 現生♂ ^a	
	No19	No35
保存全長	59.3	139.1
近位最大横径	38.6	36.8
近位最大前後径	23.2	23.5
橈骨頭横径		23.3
骨体中央横径		24.6

第16表 シカ中足骨測定計測値・比較表 (単位 mm)

	大井城		足尾山地 現生♂
	No24	No49	
保存全長	64.6		
近位最大横径		29.4+	25.7
骨体横径	20.9	21.6	17.5
骨体前後径	20.5		17.2

第15表 シカ大腿骨計測値・比較表 (単位 mm)

	大井城No24	足尾山地 現生♂
骨体中央横径	18.4	20.2
骨体中央前後径	19.8	21.7

5. ブタ (第17・18・19表)

日本にブタが渡来したのは慶長14年(1609年)にオランダ人が長崎に持ちこんだのが最初とされているが、1979年に群馬県前橋市の柳久保遺跡¹⁴⁾の平安時代の水田址で祭祀に使ったと思われるブタの橈骨が出土した。平安時代の本州にもすでにブタとよべるもののが飼養されていたのである。

1) 標本番号8、基節骨（くー4グリッド） 時代不明

完存するブタの基節骨で、近位骨端線がわずかに存在するため、年令は2才ほどが予想される。イノシシに比べて、太くて短いために家畜化の進んだブタと判断されるが、どんな系統のものかは不明である。

2) 標本番号33、右尺骨（きー6グリッド） 時代不明

尺骨の近位部が102.5mmの長さで残ったもので、3才以下の個体である。

3) 標本番号48、右上腕骨（えー8グリッド） 時代不明

骨体から離脱した遠位骨端で、1才未満の個体と推定されている。イノシシよりかなり大きい。

第18表 大井城ブタ尺骨計測値 (単位 mm)

保存最大長	102.5
尺突起における前後径	40.6+
鈎状突起における最大幅	27.4+
肘頭の長さ	38.9+

同者とも一才未満

第17表 ブタ上腕骨計測値・比較表 (単位 mm)

	大井城No48	現生
灌草部最大横径	46.2	39.1

第19表 ブタ基節骨計測値・比較表 (単位 mm)

	ブタ	イノシシ	
	大井城No8	兵庫現生	岐阜現生♂
全長	30.0	35.3	32.8
近位最大横径	18.0	16.5	14.9
近位最大前後径	18.2	18.9	16.3
遠位最大横径	15.5	15.3	13.4
遠位最前後径	11.6	12.0	9.9

6. 海生貝類

獣骨類の他にもハイガイ、ボラなど14個の海生貝類が出土している。このなかの少なくとも一部は中世のものであり、食用されていたようである。

引用文献

- 1) 野沢謙・西田隆雄 (1970) 「日本とその周辺地域の在来家畜の由来」科学 40巻1号 PP29-35
- 2) 日本歴医学会家畜解剖分科会 (1978) 「家畜解剖学用語」日本中央競馬会
- 3) 長谷川善和・原田俊治 (1979) 「馬と進化」「動物社」[SIMPSON, G G (1951) 「Hourse, Oxford University Press】
- 4) 林田重幸 (1978) 「日本在来馬に関する研究」日本中央競馬会
- 5) SILVER, I A (1963) 「The aging of domestic animals」 In "Science in Archaeology" (Brothwell and Higgs eds.) PP.283-302 Thames and Hudson.
- 6) 岡部利雄 (1953) 「木曾馬について—日本在来馬に関する研究」日本学術振興会 PP.75-162
- 7) 林田重幸・鈴木孝司 (1974) 「川入遺跡出土の馬骨について」岡山県埋蔵文化財調査報告書・2集 PP.354-367
- 8) 宮崎重雄 (1986) 「長野県佐久市池畠遺跡出土の馬と牛の骨について」「池畠」佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第2集 PP.50-60
- 9) 宮崎重雄 (1985) 「野火付遺跡出土の馬骨について」「野火付遺跡」長野県北佐久郡御代田町野火付遺跡発掘調査報告書 PP.157-159
- 10) 宮崎重雄 (1986) 「吉岡村大久保A遺跡出土の馬歯・馬骨」「大久保A遺跡」II区、関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第2分冊 PP.372-378
- 11) 仙波輝彦 (1960) 「長崎県壱岐島中期及び後期弥生式時代遺跡出土哺乳動物骨の研究」人類学雑誌 4巻4号 PP.190-233
- 12) 日本電信電話公社・港区伊豆子貝塚遺跡調査会 (1981) 「伊豆子貝塚遺跡」
- 13) MASON, I L (1984) 「Evolvtion of domesticated animals」 Longman.
- 14) 宇田川竜男 (1971) 「劍島・家畜」標準原色図鑑全集18、保育社
- 15) 宮崎重雄 (1985) 「柳久保水田址出土のブタの焼骨と馬歯」「柳久保遺跡群I」前橋市埋蔵文化財発掘調査団



大井城跡（昭和59年度調査 黒岩城跡第Ⅱ調査区）

株式会社協同測量社撮影



1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区全景
(北方より)



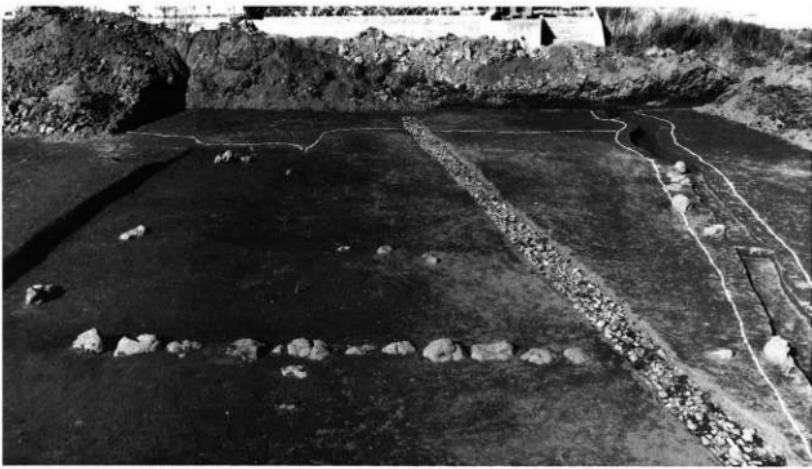
2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区全景
(東方より)



3 黒岩城跡
第Ⅱ調査区南部
(北東方より)

1 黒岩城跡

第Ⅱ調査区
F1号櫓立柱建物址
(南方より)



2 黒岩城跡

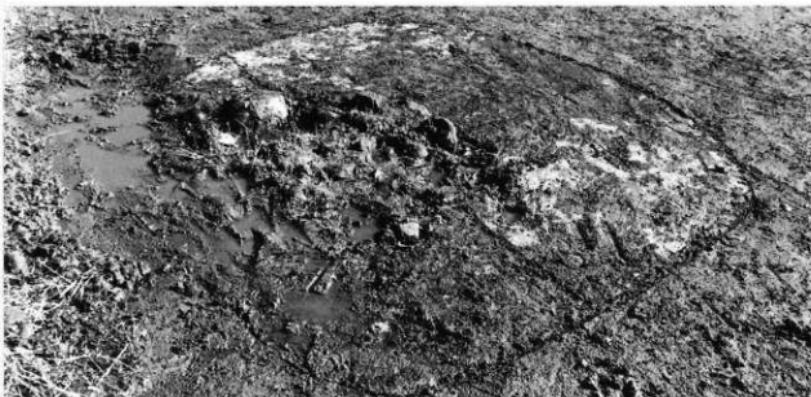
第Ⅱ調査区
F1号櫓立柱建物址
(東方より)



3 黒岩城跡

第Ⅱ調査区
D14・15号土坑
(北方より)

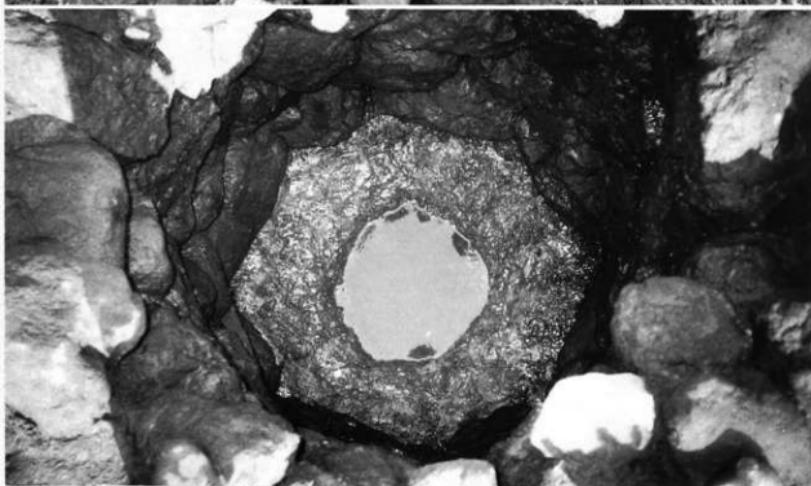




1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
1号井戸址



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
1号井戸址



3 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
1号井戸址

1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
1号井戸址



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
1号井戸址





1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
(北方より)



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
(北方より)



3 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
畦状構造と暗渠
(北方より)

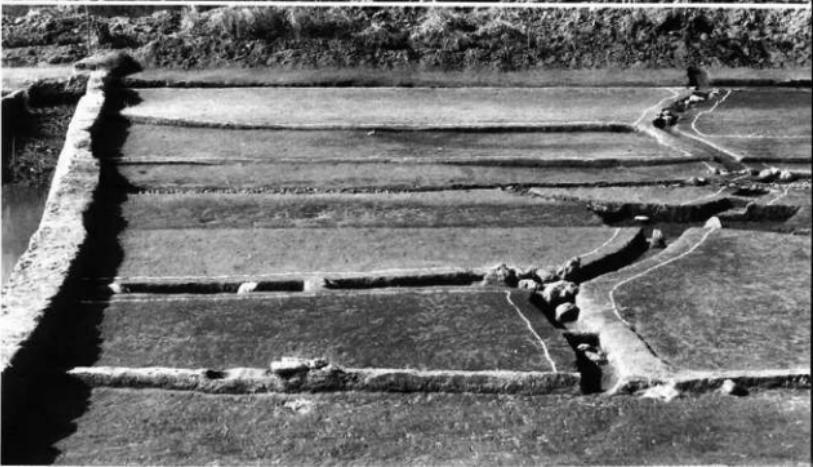
1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
(南方より)



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
(東方より)

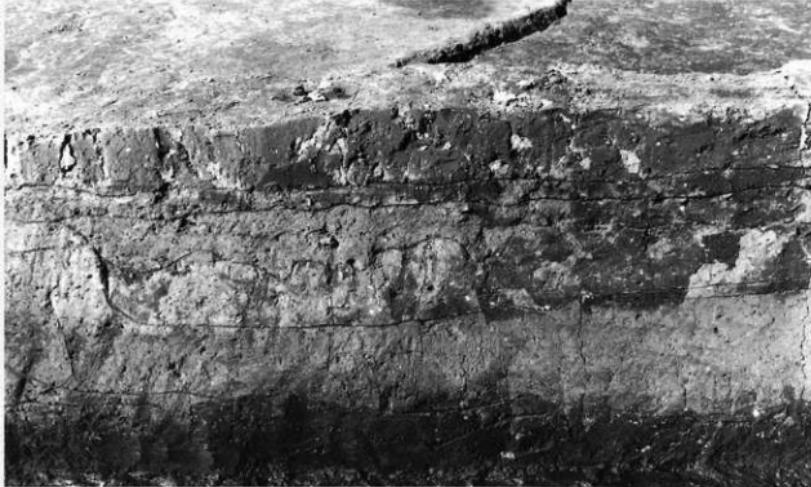


3 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
(東方より)





1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
暗渠とトレンチ4
(東方より)



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
トレンチ4の層序



3 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
下駄出土状態

1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区暗渠
(東方より)



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区暗渠
(西方より)





1 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
スナップ
(南西方より)



2 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
スナップ
(東方より)



3 黒岩城跡
第Ⅱ調査区
スナップ
(西方より)

1 工事が進む黒岩
城跡
(北東方より)



2 工事が進む黒岩
城跡遠景
(北東方より)



3 調査スナップ



1 王城の櫻と
(長野県天然記念物)
A地点に建てられた四阿



2 王城跡D地点
(西方より)



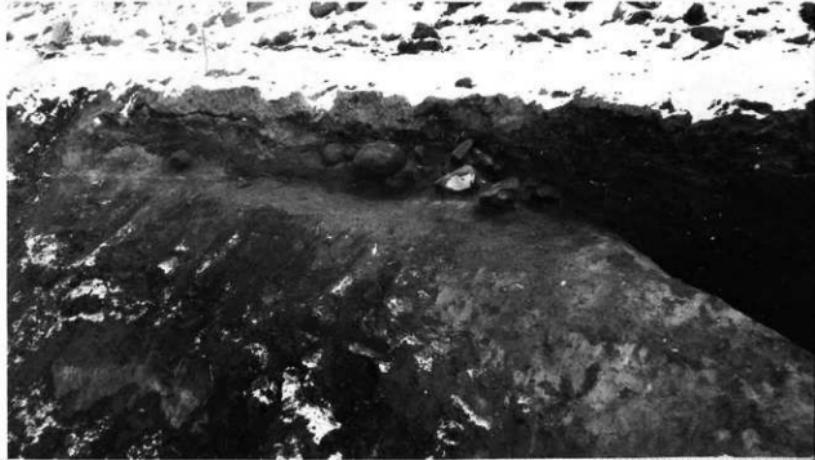
1 王城跡D地点
(西方より)



2 王城跡D地点
壁穴造構
(南方より)



3 王城跡D地点
西侧部
(南東方より)





1 黒岩城跡北端部
調査前遠景
(中央道路、左が
黒岩城跡、右が
王城跡。東方よ
り)



2 黒岩城跡北端部
調査前近景
(東方より)



3 黒岩城跡北端部
調査前近景
(東方より)

1 黒岩城跡北端部
調査前近景
(北方より)

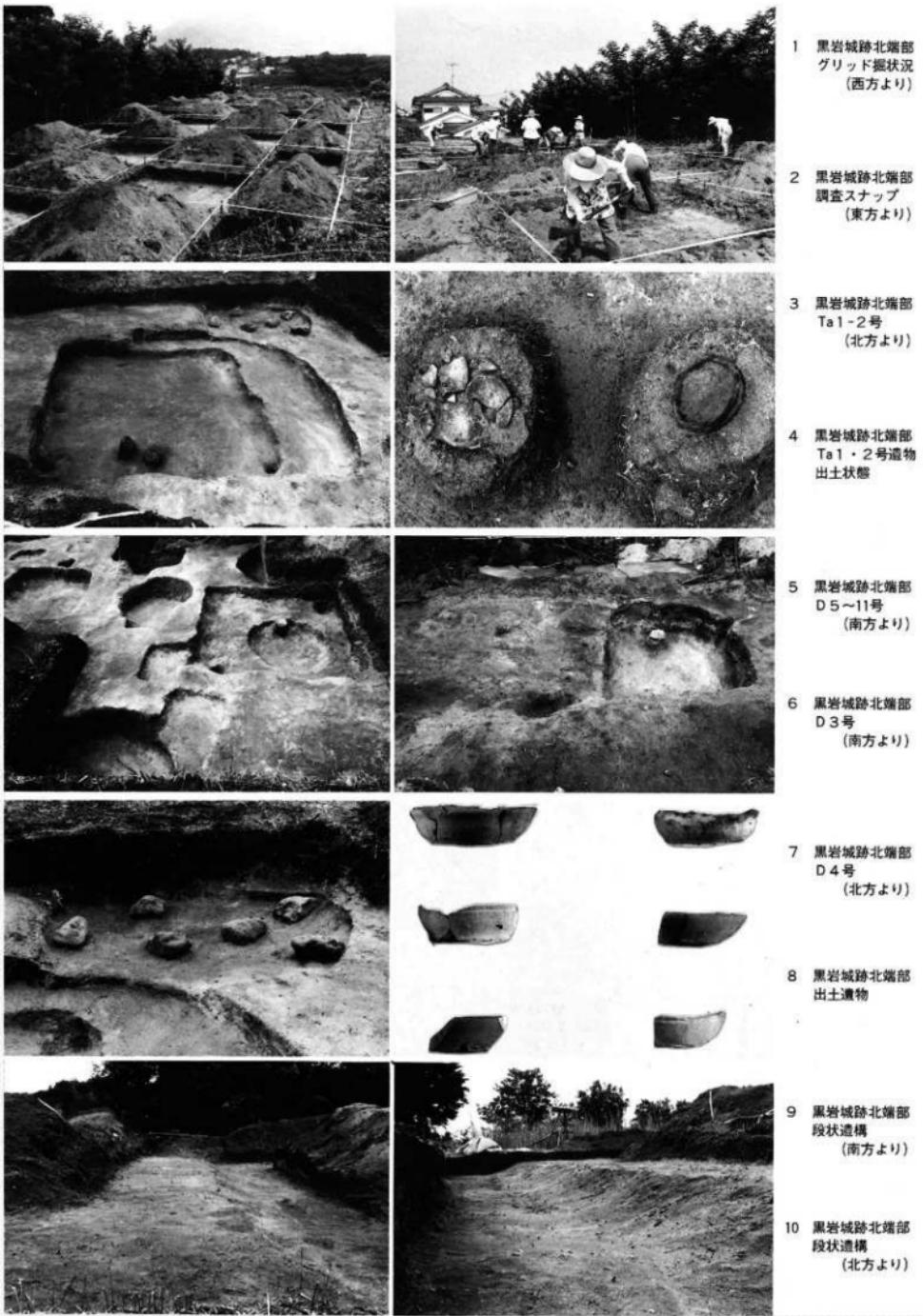


2 黒岩城跡北端部
調査前近景
(西方より)



3 黒岩城跡北端部
調査前近景
(東方より)





1 六供後遺跡
A～D トレンチ
(南方より)



2 六供後遺跡M1号
(大井城跡1号掘出)
(東方より)



3 六供後遺跡M1号
(大井城跡1号掘出)
(北東方より)





1 六供後遺跡M1号
F トレンチ
(大井城跡1号堀址)
(北方より)



2 六供後遺跡M1号
F トレンチ
(大井城跡1号堀址)
(東方より)



3 六供後遺跡M1号
E トレンチ
(大井城跡1号堀址)
(東方より)

1 六供後遺跡壙址
Aトレンチ
(大井城跡2号壙址)
(西方より)



2 六供後遺跡壙址
Aトレンチ
(大井城跡2号壙址)
(北方より)

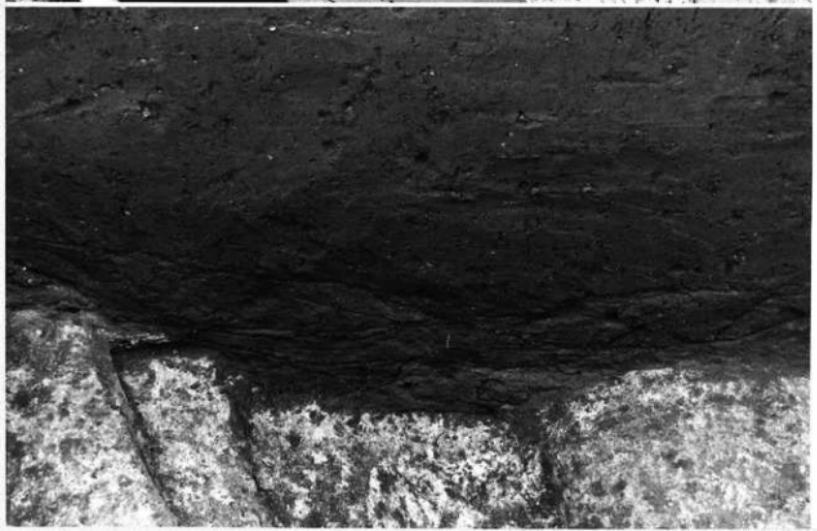




1 六供後遺跡場址
B トレンチ
(大井城跡2号場址)
(東方より)



2 六供後遺跡場址
B トレンチ
(大井城跡2号場址)
(南東方より)



3 六供後遺跡場址
B トレンチ
(大井城跡2号場址)
(東方より)

1 六供後遺跡遺址
B トレンチ
(大井城跡2号遺址)
(北方より)



2 六供後遺跡遺址
B トレンチ
(大井城跡2号遺址)
(北方より)





1 六供後遺跡場址
Bトレンチ
(大井城跡2号場址)
(北方より)



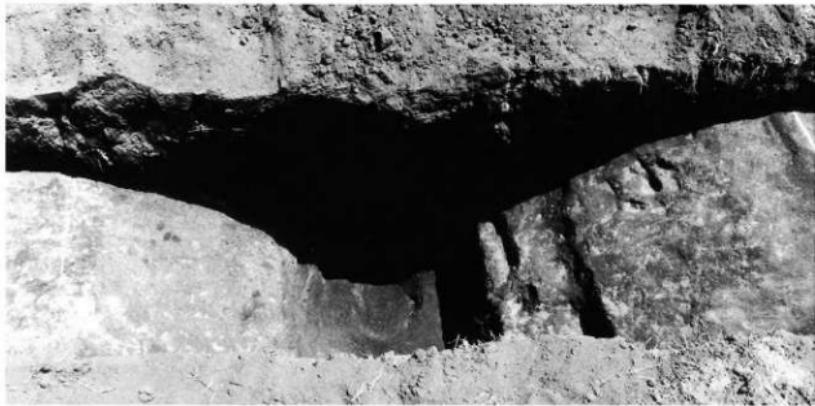
2 六供後遺跡場址
Bトレンチ
(大井城跡2号場址)
(南方より)

1 六供後遺跡壙址

Cトレンチ

(大井城跡2号遺跡)

(西方より)



2 六供後遺跡壙址

Cトレンチ

(大井城跡2号遺跡)

(東方より)



3 六供後遺跡壙址

Cトレンチ

(大井城跡2号遺跡)

(北方より)





1 石並城跡遺址
(大井城跡3号遺址)
(西方より)



2 石並城跡遺址
(大井城跡3号遺址)
(東方より)

1 石並城跡堀址
(大井城跡3号堀址)
(西方より)



2 石並城跡堀址
(大井城跡3号堀址)
(南方より)





1 石堂遺跡 Ta1号
竪穴造構



2 石堂遺跡 Ta1号
竪穴造構
(北方より)

1 石堂遺跡
Ta1号堅穴遺構
(南方より)



2 石堂遺跡
Ta1号堅穴遺構
出土遺物



大井城跡(黒岩城・王城・石並城跡)調査報告書

昭和 63 年 3 月発行

編集者 佐久市教育委員会

発行者 佐久市教育委員会

長野県佐久市中込 3056

電話 0267-62-2111

印刷所 株式会社佐久印刷所



大井城跡（黒岩城跡第Ⅰ調査区）遺構全体図